

42304

教科書文庫

4
810
42-1933
200030/826

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

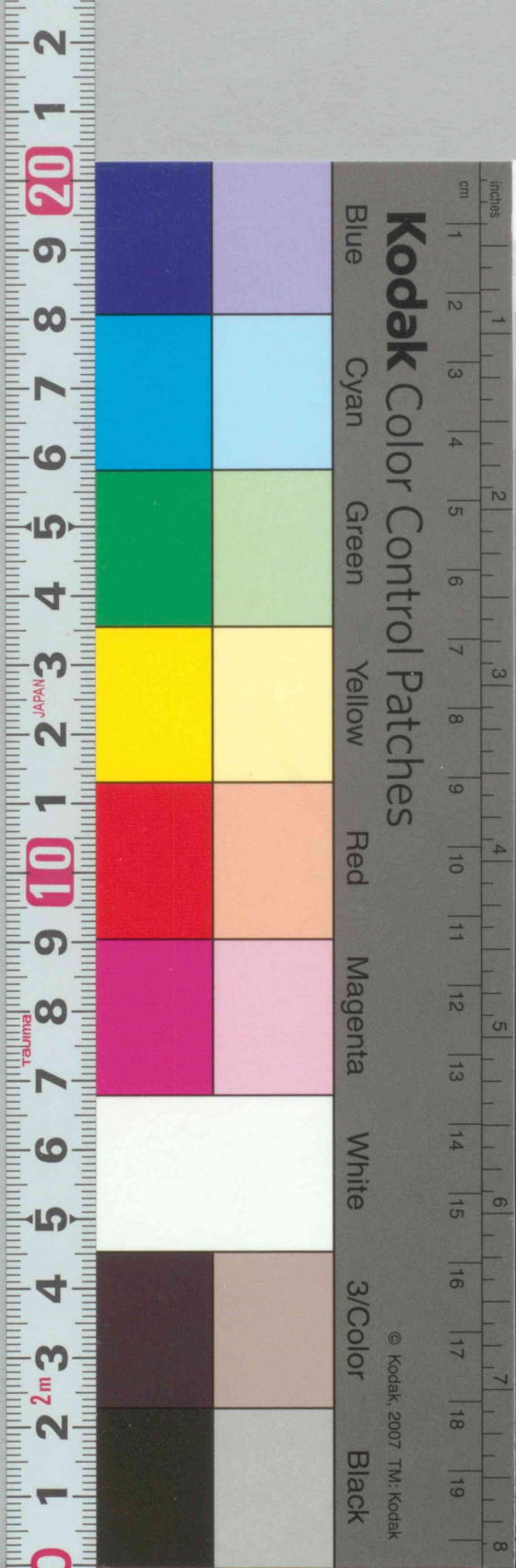


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759  
Ta11  
資料室

日本女子讀本

改訂  
第一版  
卷一



375.9  
T211

文部省檢定濟

高等女子學校國語科用 昭和八年九月二日

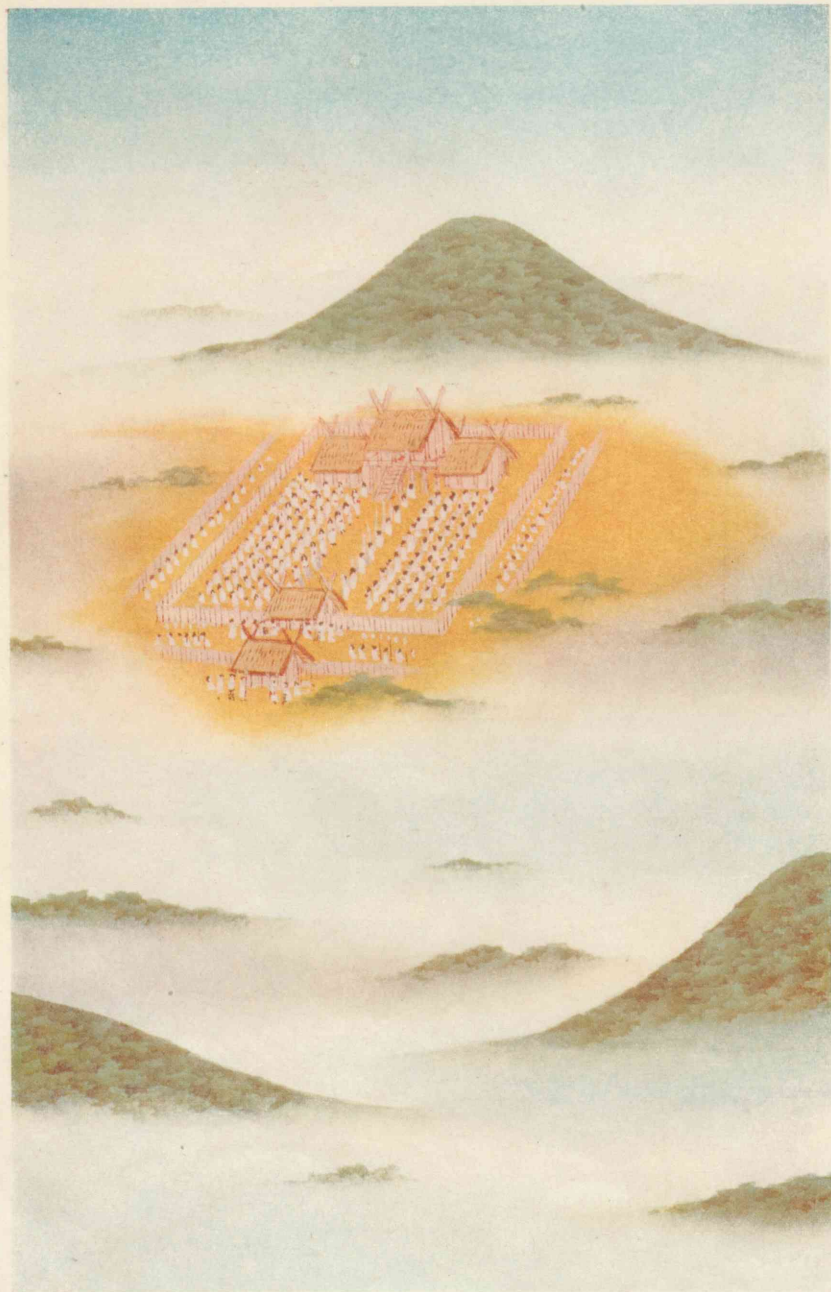
文学博士 高木武 編

日本女子讀本

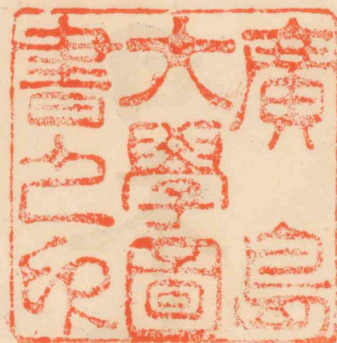
改訂  
第一版

東京 富山房 版

文学博士 高木武 編  
日本女子讀本  
東京 富山房 版



建國の日 小村雪岱筆



日本女子讀本 卷一

目次

一	建國の日	中西悟堂	一
二	櫻の國の少女(詩)	中山牧水	七
三	明るい自然	若山牧水	九
四	多摩御陵に詣でて(書翰)		一六
五	皇后陛下	(金枝玉葉帖)	二
六	赤道祭	吉江喬松	三
七	苗	相馬御風	三九

八	初夏の頃	島木赤彦	四三
九	若葉(詩)	白鳥省吾	四六
一〇	犬の話	中根榮	四八
一			四八
二			五三
三			五七
一一	猫の失敗	夏目漱石	六〇
一二	新滿洲の旅	安倍季雄	六九
一三	大島の旅から(書翰)	大村嘉代子	八〇
一四	蝶々の旅(詩)	北原白秋	八七
一五	薔薇	茅野雅子	九一
一六	バナマ帽子	佐藤紅綠	九九

一七	山を懷ふ	黒田初子	一〇五
一八	星(對話)	山本一清	一二四
一九	螢	前田夕暮	一二五
二〇	我が國の家庭	芳賀矢一	一二九
二一	優しい秋(詩)	與謝野晶子	一三五
二二	寓話	楠山正雄	一三八
一	一四重奏		一三八
二	二幸福の訪問		一四一
二三	時計の歴史	西村眞次	一四六
二四	大東京		一五五
一			一五五

二  
 二五 雜木林 . . . . . 二六  
 德富健次郎 . 二六七



日本女子讀本 卷一

一 建國の日

新しい春を迎へた大和の國原は、喜にはえてゐた。東に  
 近く頭をもたげた天の香久山、北の野末にやゝ遠く横た  
 はつた耳成山、西から南に連なる金剛葛城、吉野の山々は、  
 早春の空にほんのりと霞んで、風はまだ寒いが、何となく  
 春めいてなごやかである。近くの畝傍山の濃い緑の色も  
 さわやかに浮立つて見え、いろ／＼な鳥の聲は朗かにか

天の香久山・  
 耳成山  
 耳成山は奈良  
 縣磯城郡にあ  
 る

畝傍山  
 同縣高市郡

まびすしく、それがあたりの静けさを一層はつきりと感  
じさせるやうに思はれる。

その畝傍山の麓の檜原で、今日神武天皇が始めての御  
位にお即きになるのである。宮は新しく御造營になつた  
ので、荒木のまゝの木の香がすくしく胸にしみ、あた  
りは塵一つとゞめないまでに浄められてゐる。まだ人智  
が開けず、鳥のやうに木の上に巢を作つて住み、獸のやう  
に穴を掘つて隠れてゐたその時代の國民が、今までのあた  
りこれを仰ぎ見て、どんなに驚きあがめたことであらう。  
この宮を營まれるに當つて天皇は仰せられた。

「時代と共に推移つて、少しでも萬民の幸福を進めて行

檜原  
今、ここに宮  
幣大社  
宮が鎮座する

くのが聖人の道である。我々はいつまでも野蠻な生活



檜原神宮

に安んずべきではない。まづ模  
範を示すため、ここに山林を開  
いて宮殿を造り營み、天皇の位  
に即いて大御民を治めようと  
思ふ。これこそ遠く皇祖天照大  
御神がこの國を授けられ、近く  
皇孫瓊々杵尊がそれを承けて  
傳へられた思召にかなふもの  
である。やがてこの大和の都を  
全國の都とし、天下をあげて民と共に住む廣い家とす

ることは、何といふ喜ばしいことであらう。

萬民を子としていつくしまれる温かい聖人の御心と、四方に向かつて國を開かうとなされる勇ましい英雄の御志と、二つながらこの畏い大詔の中に拜されるのである。

日向の高千穂宮で天皇が始めて御兄五瀬命と共に東征を思ひ立たれてから今日まで六年、その間具さに嘗めさせられた御辛苦の程は、推量り奉るだに恐多い。海路遙遙東に向かはせられ、河内國から進んで大和に入る途を、長髓彦のために孔舍衙坂に遮られ、痛ましくも五瀬命が賊の矢により深傷を負はれた時の御歎き、御憤はどんなであつたらう。それから一旦軍をかへして、南の紀伊路か

孔舍衙坂  
生駒山脈を河  
内から大和に  
越える山道。

ら再び大和に入らうと企てられ、八咫鳥の道しるべをたよりに險阻を分けて兄猾弟猾を或は降し、或は滅ぼされ、やがて八十建や兄磯城弟磯城、遂に長髓彦まで御弓弭にとまつた金色の鶏の光で難なく誅伐された。その間には、賊の悪だくみをくじいて萬死に一生を得られたこともあつた。兵糧を絶たれて兵士と共に饑ゑられながら、御みづから先頭に立ち、歌を作つて鼓舞されたこともあつた。すべては神々しい智慧と武勇と情愛との尊い物語であつた。

しかし今や賊徒は全く平定されて、皇威に喜び服さぬ者もない。大和平野の南に深く山に迫つた檜原の地に皇



正月朔日  
新曆の二月十  
一日即ち紀元十  
節の日に當る。  
〔禁轉載〕

居は定められ、そして今日の御即位式となつたのである。見わたせば、宮殿の内外に充ち満ちた群臣たちは、寂として誰一人聲をたてる者もなく、その手にした矛や楯はきら／＼と日に輝きわたつて、まばゆいほどに美しい。かくて三種の神器が正殿に奉安され、壽詞が奏されて後、神武天皇には、嚴かに高御座にお登りになる。この時、並みゐる群臣たちは、思はず感涙の目がしらに溢れるのを覺え、ると同時に、天をも搖るがすばかり高らかに萬歳を唱和した。それは何といふ莊嚴な瞬間であつたらう。時、時は紀元元年正月朔日、かくして大日本帝國の基礎は、磐石のやうに堅固に定まつたのである。

中西悟堂  
詩人、石川縣  
十八年生

二 櫻の國の少女

中西悟堂

五百重の潮に圍まれて  
櫻の國の少女らは、  
明るくあれよ、春の日に  
咲きては競ふ、その花と。  
野邊の綠に色はゆる  
大和撫子、そのごとく  
心優しくみやびかに  
あれよ、大和の少女らよ。

姿ゆかしき白菊の  
けがれも知らぬ、そのごとく  
心を直に、つゝましく  
生きよ、身のため、人のため。  
寒さにめげず冬を咲く  
梅の花とも、少女らよ  
操を守れ、くるしみも  
なやみも堪へて勵めよや。

〔禁轉載〕

若山牧水  
歌人、名は繁、  
宮崎縣の人、  
昭和三年歿。

香貫山  
静岡縣沼津市  
の東郊に聳え  
る。

み空に高く白玉の  
姿さやけき富士に似て、  
けだかく、清く、うるはしく  
生きよ、大和の少女らよ。

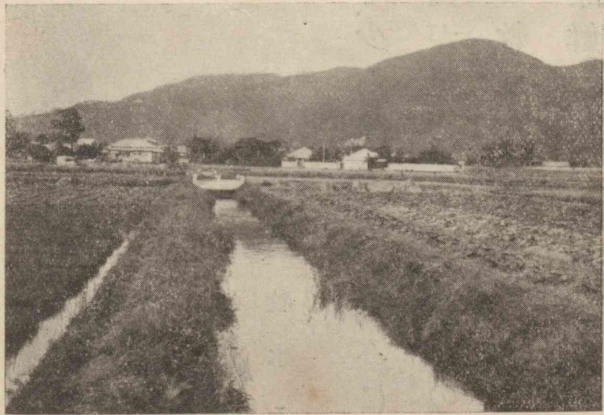
三 明るい自然

若山牧水

書齋の窓際の椅子に腰掛けて、少し體を前かゞみにす  
ると、眞白な櫻木立の間に香貫山が見える。その圓みのあ  
る山を包んだ小松の木立も、この數日來急に春めて來  
た。山一面の小松の綠青色が一際鮮かに浮きあがつて見  
えるのである。

何といふことなく私の心はやはらぎ、しきりに山の青  
いのが懐かしくなつたので、椅子を立つて、裏木戸から畑の中へ出た。

畑つゞきにその山の麓まで私の家から五町と離れてゐないのだ。畑には大抵百姓たちが出てゐた。麥は穂をはらみ、豌豆には濃い紫の花が咲いてゐる。附近の百姓家からでも來るのか、そんな畑の中にも櫻の花びらの散つてゐるのが見ら



山 貫 香

江の浦  
沼津市の東南  
方にある入江

れる。古い寺の裏を通り過ぎて登りかゝる道は、この小山に登る四つ五つの道のうち、最も険しい道である。しかしそれが私の家からは一番近い。私は中腹のやゝ窪みになつた所まで登つたが、そこには、他の場所と同じくやはり一面に小松が生えて、松の下には、草が程よく地を覆うてゐる。そこからは、海を見るに都合がいい。殊に廣い駿河灣一帶よりも、すぐ眼の下に見える江の浦の細長い入江を見るに恰好な所に當つてゐる。  
「やれ〜」  
かう獨言をいひながら、私はそこにつき坐つた。

入江を越した向ふの伊豆の連山には、重い白雲がかゝつてゐた。上は濃く、下は淡く、そしてその淡い所だけが微かに動いてゐるやうに見えた。山かげの入江は、いかにも冷たくどんよりとして、どこをたづねても小波一つ立つてゐようとも思はれなかつた。不思議とまた、いつもは必ず二つか三つ眼につく發動機船も小舟も一向に影を見せなかつた。入江に沿うたこちら側の長い松原の蔭には、萼ばかりが散残つてゐるやうな桃の畑が、しめり深い空氣の中に、氣味悪い赤みを帯びて連なりわたつてゐた。曇つた空の下を吹くともなく吹いてゐる風は、殊に山の上だけに相當寒かつた。そのうちに、ぼつりと冷たいも

のが額に當つた。氣をつけると、袖にも足袋にも小さな雨が降つてゐる。しかし眞上の空は、青みこそないが、いかにも明るく晴れてゐるのであつた。

木が、終にあたりの葉の深い松の木を探して、その蔭に引つこまねばならなかつた。急に雨の粒が大きく荒らくなつて來たのである。松の蔭に入ると、惜しいことには海は見えなくなつた。

次第にあたりの松の葉がぬれて行つた。それぐの松のそれぐの枝のさきには、いづれにも今年の新しい芽がほの白く伸びてゐる。淡い緑の上に白い粉をふいたやうなその柔かな芽のさきには、また必ず桃色か紅色の

小さな玉が三つか四つづつ着いてゐた。露ほどの大きさで紅色の美しいのもあり、既に松笠の形をして紅のあせてゐるのもあつた。それに微かに雨がそゞいでゐるのである。

帽子の前に垂れてゐる松の葉のさきからぼつり／＼としづくが垂れだした。しかしまだ羽織の袖はそれほどにはぬれて來ない。心はいよ／＼靜かに明るく、あたりの木も草も、まつすぐに降る山窪の雨の白さも、みな極めて楽しい眺となつて來た。

「燕……」

私は思はず聲に出して、自分の前の山あひに舞下りて

はまた高く舞上がつて行く小さな鳥に眼をとめた。全くそれは今年始めて見る燕であつた。

「來たなあ。」

さう思ひながら、私は松の蔭からはひ出して行つた。

一羽、二羽、三羽とつゞいてその身輕な鳥は、眞青な小松の中を渡つてゐるのだ。

幸と雨は晴れて來た。急に輝いて見える伊豆の山の白雲のかげの海の色は、山の根だけ日本刀の峰などに見る青みを宿し、片側の廣い部分には、さら／＼として細かな波を立てはじめてゐた。

（樹木とその葉による）

四 多摩御陵に詣でて

澤子様。昨日の日曜は大變麗かなお天氣でございましてので、私は妹をつれて、始めて多摩御陵に詣でました。中央線淺川驛に着いたのは、午前十時頃でございました。それから廣い氣持のいい道を十町ばかりまゐりますと、すぐ參道の入口に出ました。せゝらぎの音もやさしい淺川の流にかゝつた南淺川橋を渡りますと、兩側にはみづく、しい若葉をつけた櫟けやきの並木が整然と續き、白い玉川砂利を敷いた參道は、日の光を

淺川驛  
東京府淺川町  
にある。

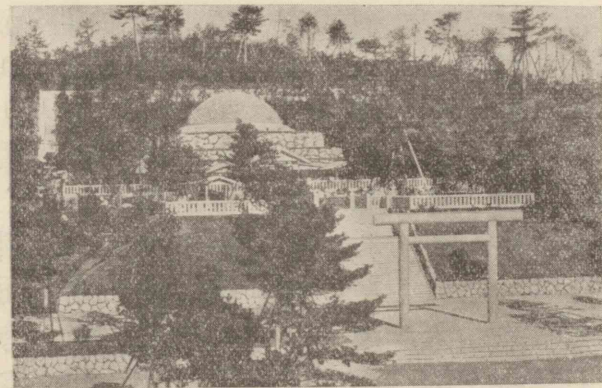
淺川  
末は多摩川に  
入り、東京灣  
に注ぐ。

浴びてまぶしいほどでございます。參道は緩くうねり、緩く斜面をなして、一路參拜者を御陵に導いてゐます。櫟の並木のかなたは、いはゆる武藏野で、麥畑・桑畑にはそよよと春風がわたり、菜種や大根の花が毛氈を敷いたあたりには、雲雀も愛らしく鳴いてゐました。

やがて神苑にはいりますと、一面にすくくと立つた杉の若木の梢の上に、高尾山たかおさんが淡い霞に柔かく包まれて、午に近い春の空を劃くわつてゐるのが見えます。あたりには一入森嚴ひびの氣が漂うて、おのづと身も心も引緊ひびまるのを覚えまし

高尾山  
淺川町の西方  
に聳え、東京  
西郊の名所に  
なつてゐる。

たが、いつしか參道は盡きて、御陵の大前に出て



多 摩 御 陵

ありました。檜の大鳥居は日に照りはえて銀のやうに輝いてゐます。おゝ、その奥を見上げた私の目には、大正天皇の英靈とこしへに鎮まります御陵が仰がれたのでございませぬ。私は清らかな山水に口をそゝぎ、手を淨めて、大鳥居の下に立ちました。

澤子様。その瞬間、私の心は何ともいへない神氣に打たれて、水のやうに澄みわたりました。あたりにある多くの参拜者も、寂として聲をたてる人もございませぬ。たゞそよ吹く風の、幽邃な松林をわたる音が微かに傳はつて來るばかり。やゝあつて、漸く頭を擧げた私の心に、我知らず浮かんでまゐりましたのは、あの御大葬儀當夜の悲しみに閉された思出でございませぬ。最後の大御幸の鹵簿が、篝火の色も愁はしい都大路をしづく、と過ぎ給うた時、私も青山通で靈柩をお送り申し上げたのでございませぬ。が、當夜、

御大葬儀  
昭和二年二月  
七日に行はせ  
られた。

青山通  
東京市赤坂區。

今上陛下の御名代として秩父宮殿下が、零下十  
二度の嚴寒に御外套も召されず、終始うつむき  
がちに肅々と供奉遊ばされてゐた御姿が、まざ  
まざと私の胸に蘇つてまゐりました。

私は御陵の大前を辭して、再びもとの參道を  
歸る途すがら、胸はふさがり、妹とも殆ど言葉  
をかはさず、その心持は午後二時頃家に歸り着  
くまで續いたのでございました。

別封の繪葉書は、その時參道に沿うた繪葉書  
屋で買つたものでございます。私の手紙と一緒  
に御覽になつて下さいませ。さやうなら。

〔禁轉載〕

### 五 皇后陛下

一

明治三十六年の三月六日は、實に記念すべき日でござ  
いました。我が國母、皇后陛下が、久邇宮邦彦王殿下の第一  
王女として、麻布區烏居坂町の宮邸に御生誕あらせられ  
た日なのでございます。今は亡き父君邦彦王殿下は、青蓮  
院宮の御子にましまし、英名隠れない御方、母君倪子妃殿  
下は、故從一位公爵島津忠義氏の第七女、明敏貞淑の譽高  
い御方でございます。

陛下には、明治四十二年四月、學習院女學部初等科に御

青蓮院宮  
伏見宮  
親王の御事  
京都の青蓮  
に都王の御  
がに住み給  
あるこの御  
がた



入學遊ばされた頃より、既に衆にぬきん出た御氣品と御才藻とお具へになつていらせられました。そして諸事御活潑にわたらせられ、御學科に對する御答なども御明瞭直截にて、御學友の多くは、常に陛下の御言動を御手本としたと傳へられてをります。

私たち民草が特に喜に堪へないのは、陛下が極めて御壯健にわたらせられる御事でございませう。随つて、御幼少の時分より、御活潑な運動遊戯をお好みになり、初等科の御時代にも、運動場へなどお出で遊ばされて、いざ御遊戯となると、非常に御身輕に御活躍遊ばされました。中等科に入らせられて後は、テニスを特に好ませられ、御學友

をお相手に、いと見事な御運動ぶりをお示しになりました。



御就學時代の皇后陛下

今上陛下もテニスには長じさせ給ふので、まだ皇太子にておはしました頃、世界的名聲ある選手たちを御殿に召され、御二方にて御熱心に御覽あらせられ、諸選手が美技を演ずる折など、御二方とも會心の御微笑を遊ばされたと洩承つてをります。

一方にまた、いたく御敬神の念に富ませられ、殊に御成婚前には、毎朝必ずまづ第一に、御殿の後苑に祀られた皇大神宮に御參拜あらせられ、かつて怠らせ給うたことはございませんでした。

植物花卉の類をも非常に御愛好遊ばされ、御幼少の時分より、宮家の花壇にさまざまの草花を御培養になりました。春秋、珍しい花を咲かす草花も、夏冬の御手入は一通りのことではございませぬ。陛下は御手づから日ごとに水をそゝがれ、若芽の生ひたつのお楽しみになつていらせられました。

瑞穂の國の國母陛下にまします貴い御身より、わけて

も農事の御研究に御心を用ひさせられ、御本邸の一部に數坪の田畑を設け、稻・麥・棉・豆の類をお植ゑつけ遊ばされ、殊に米の收穫時には、侍女たちと共に御みづから御鎌をお持ち遊ばされるのでございまして、皇太后陛下も特にさやうと洩承ります。毎春秋、宮中紅葉山におかせられたの御養蠶にも、陛下はとりわけ御熱心にわたらせられると拜聞致します。

陛下がまた、日頃よりいたく仁慈の御心に富ませられることも、隠れない事實でございまして、ずつと以前の御用係の一員である杉浦重剛翁が、病のため、やむなく御進講を辭しまつた時など、この寒さに、病體では定めし

杉浦重剛  
一生を育英の  
道に捧げた學  
者で、崇高な  
人格者として  
仰がれた。大  
正十三年歿。

大震災  
大正十二年九月一日に關東地方に起つた  
赤倉  
新潟縣妙高  
山の中腹にあ  
る温泉場

……と深く御心にかけてさせられ、陛下の桃のお節句が、あ  
たかも杉浦翁の誕生日に當ることをお聞き遊ばされる  
と、御親しく御筆を執らせ給ひ、雛人形を繪絹に描かせら  
れ、病床にある翁のつれづれをお慰めになりました。  
あの大震災の時は、陛下は父君・母君と赤倉に御滞在で  
いらせられました。が、新潟縣下へ避難する者の數が續々  
と増してまゐりますと、陛下はまづ母君と語らせ給ひ、妹  
君のよ信子女王殿下をはじめ、二三の侍女たちをお相手に、せ  
つせと御針を運ばせられ、忽ちに男物・女物・子供物各五十  
枚づつの衣類をお仕立てになり、それを急ぎ避難者に下  
賜されたのでございました。

二

御幼少より御才藻高き姫君にてましましたので、陛下  
は、まだ學習院女學部に御在學時代より、特に御和歌にす  
ぐれさせ給ひ、また御習字も極めて御堪能にわたらせら  
れ、當時よりまことに御見事な御染筆ぶりを拜見致して  
をります。

次に御歌を拜記致しませう。

女王時代の御歌

まこと

いかばかり身はひきくとも眞心をたもたむ  
人ぞたふとかるべき

東宮妃殿下時代の御歌

河水清

水底のさゞれのかずもよむばかり河のなが  
れのきよくもあるかな

松間梅  
きいたかくもさ  
梅の花まつけり  
ち風にしほひ

松  
間  
梅

是のちのくもあきしやあり梅乃花  
正つふく風よふ月いぢうて良皇王

蹟筆御の下陸

皇后陛下として

朝海

はつ日かげ海よりいづるのどけさに年も心  
もあらたまりけり

陛下の御日常は、御側近の方たちよりお伺ひしただけ  
でも、既に一つの御教訓と申し上げてもよろしからうと  
存じます。御起床はいつも今上陛下より三十分ほどお早  
く、午前六時にはお目覚めあらせられ、御洗面後、御髪をお  
なほし遊ばされ、お召替の上、今上陛下の御起床をお待ち  
遊ばされる順序と拜聞致しました。

次いで兩陛下お揃にて御拜の間に入らせられ、伊勢大  
廟をはじめ、明治大帝、昭憲皇太后、大正天皇の御陵を御遙  
拜遊ばされ、その後始めて御朝餐の卓につかせ給ふと洩  
承ります。御就寢の際も大概午後十時半頃で、今上陛下よ  
りも半時間もお遅れになり、今上陛下のお身のまはりの

御事は、何一つ女官たちの手を煩はすことなく御處理遊ばされます。

朝の御食事を終へさせられた後は、その日の新聞を御覽になり、四方山の御物語がございます。そして今上陛下は御政務に、御學事に向かはせ給ふのでございませうが、陛下も決して御學問を閑却遊ばされず、フランス語、漢文、ピアノなどを御學習あらせられ、また時に臨時の御進講をお聴きになることもございませう。

第一皇女照宮成子内親王殿下が御降誕ましまして以來は、御母性としての陛下に、當然お忙しい日が續くやうになられました。何くれとない御心遣ひがあり、御養育に

照宮成子内親王

大正十四年六月六日御降誕  
昭和四年九月三十日御降誕  
昭和六年三月七日御降誕  
昭和六年三月七日御降誕  
昭和六年三月七日御降誕  
昭和六年三月七日御降誕  
昭和六年三月七日御降誕  
昭和六年三月七日御降誕

關する御日誌なども、決して一日としてお缺かしになりません。これは、特に皇太后陛下の限りなくお悦び遊ばされる御一事でございませう。



皇太后陛下

御晝餐は大概今上陛下と御一緒におとなりになり、午後も御共々に御運動を遊ばされることもございませう。御晩餐も勿論御一緒におとなりませうが、御料理は常に今上陛下の御好物を御理解になつて、御みづから御指圖遊ばされると洩承りました。

御晩餐後は、内親王殿下を御中心に、御睦まじい御親子の御團欒を續けさせられ、御共々ラヂオなどに御耳を傾けさせられますが、時として今上陛下が静かに御讀書など遊ばされる間、陛下はよくお編物にお親しみになります。また繁劇な御政務に今上陛下がいたくお疲れあらせられる夜など、陛下はピアノを静かに御彈奏遊ばされ、夫の君をお慰めになることもございます。

かうして陛下は、うまし國の美しき皇后宮として、長く九千萬民草の御母たる榮の日をお送り遊ばされること  
でございませう。  
(金枝玉葉帖)

吉江喬松

號は孤雁、詩人、佛文學者、  
文學博士、早稲田大學教授、  
長野縣の長治十三年生。

### 六 赤道祭

吉江喬松

世界の地圖を開いて御覽なさい。

皆さんは印度の大陸の南の端にセイロン島といふ島があるのを見らでせう。ここはイギリスの領地で、ヨーロッパへ行く日本の船は、ぜひ一度この島に碇泊します。そして印度洋を越えて、紅海からスエズ運河を経て地中海にはいるのです。

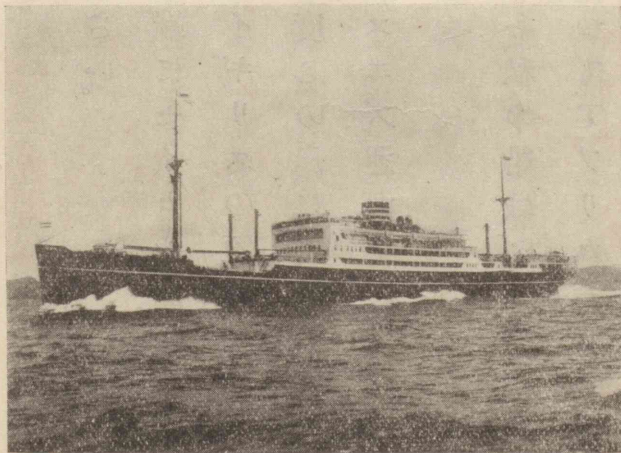
歐洲大戰の最中であつたから、私の船はこの路を通らないで、印度洋を南へくと下つて、アフリカ大陸の南の端、ケープタウンといふ町へ向かつたのです。十八晝夜の

ケープタウン  
イギリス領の  
南アフリカ  
邦の首都。

間、空と水ばかりです。

さて、船がいよ／＼赤道を越えて南半球にはいるといふ日には、船では赤道祭といふことをするのです。

まづ船員でも、また乗客でもの中から、最も多く赤道を通過した經驗のある者が選ばれて、海王にさせられます。この海王は華やかな衣服を着けて、腰に黄金造の太刀を佩き、頭に冠をいたゞいて、第



パ ッ ロ ー ヨ

一の帆柱の頂上に立ちます。すると、それに次いで、五人十人の立派に着飾つた王の従者たちが帆桁かたの上に立ちます。帆柱の下には、一段高く王座がつくられ、それからさがつて、船長以下列座し、満員悉く靜肅に甲板上に立つてゐます。やがて軍樂隊は靜かに、また嚴かに「海ゆかば」の曲を奏しはじめます。輝きわたる光の海、風のない波の上を、この樂の音は光の波と溶けあひ、もつれあつて、遠く／＼四方へ消えてゆきます。

すると、帆柱の頂上の海王以下一行の人々は、靜かに帆柱を降りはじめます。錦欄の王衣は日に輝き、黄金造の太刀は王冠と照りあつて、海王は嚴かに空から降臨するの

です。従者が先に、やがて王が甲板の上に降立つたと思ふと、今度は「君が代」が奏しはじめられます。その樂の音の間に、海王は一行を従へて、しづくくと設けの王座へ坐ります。従者たちは、この王の周圍にそれぐく座を占めて、或者は矛を、或者は旗を、或者は太刀を持つて、王座を取囲みま

す。

その時、船長は列を離れて、恭しく王の前へ出て敬禮をします。海王はその時、手にしてゐた卷物を船長の手へ渡します。船長は兩手でそれを恭しくいたゞいて、數歩退き、身を斜にして満船の人々に對し、その卷物を繰廣げながら、海王の言葉を讀みはじめます。

それは、遠く故國を離れ、無事に赤道を越えて、この船はいよいよ、南半球へはいつて行くのである。はてしない水の領土、未知の國が、その行手に待つてゐる。その未知の世界に翻る日章旗は、いつも勇ましい、いつも正しい日本人の氣象を示してゐる。いかなる國へ行かうとも、いかなる場合に出逢はうとも、日本人たるものは、この日章旗の示すやうに明らかで、大膽で、正當でなければならぬ。海上の王は今その日章旗の翻る船上に降立つて、自分の領土を開いて、喜んでこの正しい勇敢な日本人を迎へるのである。いよいよ、健かに、いよいよ、勇敢に、いよいよ、正當なものであれといふ意味を、嚴かに述べてあるのです。



船長がそれを讀みをはり、卷きをさめて、海王に向かつて一禮すると共に、甲板上に堵列してゐる會衆一同も禮をします。それと同時に、今度は華やかな「海上行進曲」が奏しだされます。そして一同は「海王萬歳・日本帝國萬歳」と三唱します。はてしない水と光との洋上に、その萬歳の聲は遠くまで、何も遮るものもない遠い水平線上までも響いてゆきます。

かくして赤道祭が一通り終ると、後は全船の人々によつて催されるさまざまの餘興が夜遅くまでも船中を賑はします。その晩の食卓が美しく飾られて、非常な御馳走のあることはいふまでもないことです。  
(角笛のひびき)

七 苗

相馬御風

田植の季節が來た。



(筆門朝高和) 頃の 植 田

今年はせつかく苗の伸びようとする盛りに、二月頃のやうな底冷きびのする寒さがやつて來て、半月餘もひつきりなしに雨が降りつゞいたために、苗の成長の悪いことといつたら、てんでお話になら

相馬御風  
名は昌治、  
論家、新潟、  
の生、明治十  
六年

ないほどである。

「かう苗が悪くては、田植をする張りあひがないな。」

こんな歎聲が田圃の到る所で聞かれた。みづから耕すべき田をもつてゐない私たちまでも、かうした力ない百姓の言葉を聞くと、たまらない不安を感じないではゐられない。百姓にとつて一年中で最も楽しい仕事のひとつとなつてゐる田植も、心持からか、今年は妙にももうさうに見える。

「昔から巳歳には饑饉が多いといふから、今年もそんなことになるのではないだらうか。」

日頃はさうした古いいひ傳へなどを眼中に置いてゐない若い男たちまでが、時にはそんなことを眞顔で話し

てゐた。

若い者たちまでがそんな風だから、老人仲間では、さうした迷信的不安がどんなに烈しいかわからない——私はそのようなことを思つて、或日、友人の家に使はれてゐる作男（おとこ）の爺さんにその事を尋ねた。その爺さんは日頃からひどく私の好きな人の一人なので、もしその爺さんがそんな事から氣を腐らせてもしてゐるなら、何とかして慰めて、せい／＼元氣をつけてやりたいと思つたからであつた。ところが、私のさうした幼い豫想は全くはづれて、反對に爺さんの口から、思ひがけない元氣のよい言葉を聞いた。

「そのやうなことをいつて氣に病む者もありませんけれど、私はさうは思ひませんね。それといふのは、私が覺えてから、苗のひどく悪かつた年に、さうひどい不作のことになつたら、そのつもりで、植ゑてから後を、平年の二倍も三倍も精出して育てればよいのです。」  
苗の悪い年には、その割に作の悪いものではない。  
苗の悪いのが氣になつたら、植ゑつけてから後で、平年の二倍も三倍もの努力をもつて稲を育ててやるがよい。  
かうした簡単な言葉のうち、何といふ底力のある安心と自信とが包まれてゐることだらうと、私はつくづく

感心しないではゐられなかつた。

「くよく／＼物を案じてゐる暇があつたら、その代りに努めよ。心配に力を費すよりは、よりよい未來のために力を費すがよい。」

私はこのやうな生活態度を、羨ましくも思ひ、貴くも思ひ、懐かしくも思つた。私たちはこの爺さんに學ぶべき多くのものがあるはずである。

(田園春秋)

### 八 初夏の頃

島木赤彦

金魚賣の呼聲が聞えると、涼味まづ動くといふ感がある。私の居村は信州の山中ゆるゑ、金魚賣の來る頃は櫟林も

島木赤彦  
本姓名は久保  
田俊彦、歌人、  
長野縣の人、  
大正十五年歿。  
私の居村  
長野縣上諏訪  
町

芽ぶかず、庭さきの柿も芽ぶかず、櫻の葉がやゝ伸びて、散  
 残りの夢<sup>うてな</sup>がなほ残る頃であつて、  
 晴れた朝は桑畑や庭に霜が見え、  
 家の中には炬燵<sup>こたつ</sup>があり、春といへ  
 ば春、夏といへば夏ともいへ、それ  
 で冬の風情も幾分残つてゐると  
 いふ頃である。さういふ山村へ金  
 魚賣の呼聲が訪れて來るのであ  
 つて、呼聲を聞くと、夏の心まづ定  
 まつて、やがて涼味の動くといふ  
 感がするのである。金魚賣の笠は白くて大きい。それほど



(筆尚雪村小) 賣 魚 金

の大ききの残雪は、村近い山の上にもぼつ／＼見えてゐ  
 る。村の木立はさすがに多く芽をふいてゐる。その中を金  
 魚賣は、聲を張上げながら靜かに歩いて行く。その聲がす  
 ると、田舎の村落が餘計ひつそりと落着くのである。

金魚賣につゞいて來るのは若布<sup>わかふ</sup>賣である。これは多く  
 越後の女であつて、赤い襷に紺の脚絆をはいて、遙々信州  
 路にやつて來る。信州ばかりではない。甲州から關東まで  
 も渡つて歩くと聞いてゐる。女の身空で旅から旅を渡り  
 歩くのは、燕の渡り歩くよりもしをらしい。金魚賣も若布  
 賣も大抵美しい聲をもつてゐて、新緑の山家に清爽の風  
 味を添へるに十分である。私の村はづれに石割工事があ

つた。その割石おとしの上で、二人の若布賣が辨當をつかつてゐた。そこには、山から湧出たばかりの清水が流れてをり、信濃柿の老木が一本立つて、些かの蔭をなしてゐた。

(赤彦全集)

九 若 葉

白鳥省吾

白鳥省吾  
詩人、宮城縣  
の人、明治二  
十三年生

若葉は光を分ちあひ、  
互に歌をうたふ。  
晴れた空の深さ、  
遠い行く雲の軽さ、  
若葉はみんな輝いて、

愛らしい光の嬰兒みどりごのやうに踊る。

暗い雨の日にも、

若葉から若葉に落ちるしづくは

眞珠のやうに光る、

若葉は雨を乳のやうに吸つてゐる。

若葉よ、

いつも楽しい朝夕に、

母なるみ空は

いつも優しい子守唄をうたつてゐる。

〔禁轉載〕

中根榮  
日本電報通信  
社の社員、岐阜縣  
の生、明治十四  
四年生

一〇 犬の話

中根 榮

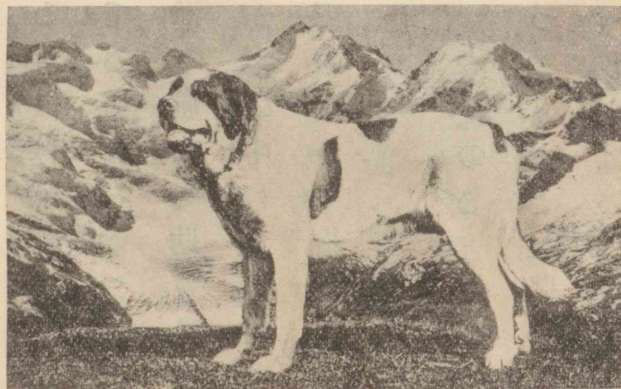
一  
犬の人に對する愛情と忠實の念とを知つたならば、人は誰しも、犬に對する愛撫の情を生ぜずにはゐられまい。セントバーナードといふ犬がある。非常に大きな犬であるが、まことに氣質のやさしい、人に對する愛情と忠實の念との殊に深い、犬の中の王と稱せられるもので、昔スキスに多く飼はれてゐた。

今はスキスからイタリーへアルプスを貫いて立派に汽車が通じてゐる。セントバーナードの英雄的物語は、ま



同 情 (ロンドン ナショナル・ギャラリー)

いた。



ドーナバートンセ

だその汽車の通じない、ずっと昔のことである。

アルプスの山中には、ところどころに小さなお寺があつたが、それはアルプス越えの旅人のために設けられた救の小屋のやうなものであつた。そのお寺に飼はれてゐる澤山のセントバーナードは、吹雪の中を突進して、そこに行きなやんでゐる旅人の道しるべをし、それを安全にお寺の中に導

澤山のセントバーナードの中に、バレーといふ名犬がゐた。彼は吹雪の音を聴くと、もうお寺の中にはじつとしてゐられなかつた。さうして吹雪を衝いてまつしぐらに進み、旅人を助けること四十人に及んだ。或少年の遭難者が雪の中に埋もれてしまつた時などは、バレーはそれを雪の中から掘出し、自分の背に乗せてお寺まで歸つて來た。

或夜のことであつた。山には雪が綿つぶてのやうにひつきりなしに降つて、見る間に三寸五寸と積んで行つた。バレーはいつものやうに雪の溪道をあちこちとさまよつて、遭難者はないかと警戒してゐるうち、ふと峠の行手

に黒い人影を見つけた。人影は少しも動かなかつた。バレーは、さてこそ遭難者であると信じ、猛然としてその人を救ふために進んだ。ところが、もう數間といふ時、轟然と起つた銃聲は、バレーを打斃してしまつた。黒い人影は狼を撃つ獵師で、バレーは狼と間違へられたのであつた。

パリにネクロポールといふ犬の墓場がある。この墓場の中に、銅で造られた立派なバレーの記念碑が建てられ



バレーの記念碑

ネクロポール  
セーヌ河の一  
つの中島



その時、

てゐる。パレーは背に一人の童子を乗せてゐる。その童子こそ、アルプスでパレーに救はれた少年に外ならない。

二

ロンドンのパディングトンステーションの前には、今日ビクトリア女皇が、何かの公式の場所に行幸遊ばされるといふので、その鹵簿のお着きにならぬうちから、幾隊かの女皇御附の近衛兵がいかめしく行列した。黒毛の長帽をかぶつた赤衣長靴の儀仗隊や、黄金色のボタンと白銀の太い顎紐との美しい龍騎兵は、たまた金繡まばゆく陽に照りはえる正装をした宮内官たちが占領してしまつたステーション前の廣場を、十重二十重に取圍んだ拜觀

パディングトンステーション  
グレートウエスタン鐵道の起點  
ビクトリア女皇  
英國の女皇と歐洲の名君とを敬慕された。西曆一九〇一年

の群衆は、この美々しくてさうして莊嚴な光景に見とれながら、固唾を呑んで、女皇の鹵簿のお着きになるのをお待ち申し上げた。

やがて長い喇叭を持つた樂手の一隊が、國歌を嚙唳と奏しはじめた時、女皇の御馬車は肅々としてステーションにお着きになつた。捧げ銃、投げつ刀、舉手、脱帽、さうしたはち切れるほど緊張した空氣の中を、どこからくゞり出たものか、ひよこくとさまよひ出た一匹の犬があつた。御馬車に近い宮内官たちは、あわてふためいて、犬を追ひやらうとするが、犬はちつとも遠慮なしに、朗かな氣分で尾をふりく、今し御馬車から降立たせられた女皇の方

に進んだ。さうして御足もと近くまで寄ると、彼は人懐かしげに女皇の玉顔を仰ぎながら、いとも親しげに尾をふりつゞけた。宮内官たちは殆ど色を失はんばかりになつて、しつと犬をかなたに追はうとした。その時である。



皇女アリトクビ

女皇は「お、愛らしき犬よ」とお呼びあらせられた。

さうして御腰をまげられ、今、玉顔を親しく仰いでゐるその犬の頭を撫で給うた。かくて御みづからハンドバッグを開かせられ、その犬の背負つてゐる金囊の中に、そこば

くの金を入れさせ給うたのである。

聲こそ立てね、並みゐる群衆の間には、犬とさうして女皇とに對する親愛の情が、嵐のやうに湧起つた。

犬はチムといふ。いつの頃よりか、パチングトンステーション



犬たう負背を囊金

の驛員たちに飼はれてゐた中型の茶色の非常に温順な、伶俐な犬であつた。彼はその背に金囊を背負つて、毎日ステーションの待合室からプラットホームを歩いて、グレ

トトウエスタン鐵道會社の孤兒遺族のために喜捨金を集め、その生涯を通じて、實に八千圓の金を集め得たのである。彼はパディングトンステーションにおいて、その驛長よりも、切符賣よりも、何ものよりも、この驛に出入する市民たちに親しまれるものとなつた。

チムが死んだ時に、この名犬の姿を永遠に傳へるために剝製として、ステーションに残すこととした。今、パディングトンステーションの切符賣場の一角に、硝子箱に入れられた、金嚢を背負うた生けるまゝのチムの姿を發見する。箱の中には、銅板の銘記があつて、チムの功勞を永久にほめたゝへてゐる。

三

アラスカ  
北米大陸の西  
北部にある半  
島で、アメリ  
カ合衆國の領  
地。  
ノーム  
アラスカの東  
北端に近い小  
都會

西曆一千九百二十五年二月のことである。アラスカのノームに恐しいデフテリアが流行した。二十四時間のうちに血清の注射をしなければ、患者は呼吸を閉されてしまふといふ恐しい病氣である。ノームにある血清は全部使ひ果されてしまつた。他の街から血清を送り届けたいと、人々は急ぎはやつたのであるが、北地の吹雪はおそろしく凄くて、容易に使者を出すことが出来ない。もう今日か明日かのうちに血清を送り届けねば、ノームの人たちを見殺しにする外ないといふ危機が迫つた。

その時、バルトーといふ橿犬きしけんが、この血清を背負つて、吹雪の中をノームに行き、ノームのチフテリア患者は、これによつて辛うじて全滅より脱することが出来たのである。バルトーがノームに血清を送り届けたといふ知らせが米國に着いた時に、義犬の名をたゞへる聲が、嵐のやうに米國民の間に傳はつた。

この犬の殊勳を表彰するために、ニューヨークのセントラルパークにその記念碑が建てられてゐるが、その碑を造る資金は、バルトーの義勇に感じた米國の少年少女の寄附になるものである。さうしてこのバルトーが死すると、これを剝製として、エール大學内の博物館の陳列棚

セントラルパーク  
中央公園。

エール大學  
米國コネチカ  
ツトにあり、  
同國學術の中  
心をなしてゐる。

に納めた。今なほ彼は、生ける如き姿して、その人類に對する愛情に燃えるまなざしを、觀覽者の上に投げてゐる。



製剝のートルバ

現在、英國には、家を失つた犬や、不具の犬を收容して、安らかにを送らせる犬の家といふのがあつた。米國には動物愛護會の病院が到る所の街にあつて、夜晝いつても、病氣になつた家畜、傷つた家畜を收容して、人に對すると同様の治療、手當を施してゐる。さうしてそれ等の犬の家や、動物愛護會の病院の經費は、世の慈善家の同情金をもつて

日本人道會  
理事長は新渡  
戸稻造博士夫  
人

〔禁轉載〕

夏目漱石  
名は金之助、  
作家、東京市、  
の年、大正五  
年歿。

我が輩  
猫自身を指す。

充てられてゐる。

我が國にも、近年、動物愛護を目的とする日本人道會が設立され、毎年動物愛護週間を開催して、動物愛護の念を宣傳し、なほ各所に牛馬給水槽を造つて、夏の炎天に重い荷物を運ぶ牛や馬に清水を與へたり、または野犬を收容して、犬と人との安全を圖つたり、更に家畜のために無料診療所を開いたりしてゐるのは、喜ばしい限りである。

## 一一 猫の失敗

夏目漱石

今夜こそ鼠を捕つて、家ぢゆう驚かしてやらうと決心した我が輩は、宵のうちから臺所に陣取つて、鼠の出るのを待つてゐる。あたりはしんとして、ゆふべのやうに柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだらう。

戸棚の中でことくと音がしだす。小皿の縁を足でおさへて、中を荒らしてゐるらしい。ここから出るわいと穴の横にすくんで待つてゐる。なかく出て來る氣色はない。皿の音はやがてやんだが、今度はどんぶりか何かにかつたらしい。重い音が時々ごとくとする。しかも戸を隔ててすぐ向側でやつてゐる。我が輩の鼻面と距離にしたら三寸も離れてをらん。時々はちよろくと穴の口まで足音が近寄るが、また遠のいて一匹も顔を出すものは

ない。戸一枚向ふに現在敵が暴行を逞しくしてゐるのに、我が輩はじつと穴の出口で待つてをらねばならん。随分氣の長い話だ。鼠は旅順椀の中で、盛んに舞踏會を催して



夏目漱石

る。せめて我が輩のはいれ  
るだけ、おさんがこの戸を開  
けておけばいいのに、氣の利  
かぬ山出した。

鮑貝あひがひがことりと鳴る。敵はこの方面へも來たなと、そいつと忍足で近寄ると、手桶の間から尻尾がちらと見えたり、流しの下へ隠れてしまつた。暫くすると、風呂場であつた

鮑貝  
猫の食器

ひ茶碗が金盥にかちりとあたる。今度はうしろだと振向く途端に、五寸近くある大きな奴が、ひらりと齒磨の袋を落して縁の下へ駈けこむ。逃がすものかと續いて飛下りたら、もう影も姿も見えぬ。鼠を捕るのは、思つたよりむづかしいものである。我が輩は先天的鼠を捕る能力がないのか知らん。

我が輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から駈出し、戸棚を警戒すると、流しから飛上がり、臺所の眞中に頑張つてゐると、三方面とも少しづつ騒ぎたてる。小癩といはうか、卑怯といはうか、到底彼等は君子の敵でない。我が輩は十五六回はあちらこちらと氣を疲らし、心を勞らして奔走努

力してみたが、終に一度も成功しない。残念ではあるが、かういふ小人を敵にしては、いかなる名將も施すべき策がない。初は勇氣もあり、敵愾心もあり、悲壯といふ崇高な美感さへあつたが、終には面倒と、ばかげてゐるのと、眠いのと、疲れたのとで、臺所の眞中に坐つたなり、動かないことになつた。しかし動かないでも、八方睨をきめこんでゐれば、敵は小人だから大した事は出来ないのである。目ざす敵と思つた奴が、存外くだらない奴だと、戦争が名譽だといふ感じが消えて、憎いといふ念だけ残る。憎いといふ念を通り過ぐすと、張りあひが抜けて、ぼーとする。ぼーとしたあとは、勝手にしろ、どうせ氣の利いた事は出来ないのだ

挿畫は「吾輩は猫である」の表紙に成る。五葉氏の筆に

からと輕蔑の極、眠たくなる。我が輩は以上の徑路をたどつて、終に眠くなつた。我が輩は眠る。休養は敵中にあつても必要である。

横向きに庇を向いて開いた引窓から、烈しい風の吹入ると思へば、戸棚の口から彈丸のやうに飛出したものが、避ける間もあらばこそ、風を切つて我が輩の左の耳に食ひつく。これに續く黒い影は、うしろに廻るかと思ふ間もなく、我が輩の尻尾にぶらさがる。瞬く間の出来事である。我が輩は何の目的もなく機械的にはね上がる。満身



の力を毛穴にこめて、この怪物を振落さうとする。耳に食ひさがつたのは、中心を失つて、だらりと我が横顔にかゝる。ゴム管のやうな柔かな尻尾のさきが、思ひがけなく我が輩の口にはいる。究竟くつぎやうの手がかりに、碎けよとばかり尾をくはへながら左右に振ると、尾だけは前齒の間に残つて、胴體は古新聞ではつた壁に當つて、揚板の上にはね返る。起上がるところを隙間なくのしかゝれば、毬を蹴たやうに我が輩の鼻面をかすめて、釣段の縁に足を縮めて立つ。彼は棚の上から我が輩を見おろす。我が輩は板の間から彼を見上げる。距離は五尺。その中に月の光が、大幅の帯を空に張るやうに横にさしこむ。我が輩は前足に力をこ

めて、やつとばかり棚の上に飛上がらうとした。前足だけは首尾よく棚の縁にかゝつたが、後足は宙にもがいてゐる。尻尾には、最前の黒いものが、死ぬとも離れまいといふ勢で食ひさがつてゐる。我が輩は危い。前足をかけかへて、足がかりを深くしようとする。かけかへるたびに、尻尾の重みで浅くなる。二三分すれば、落ちねばならぬ。我が輩はいよいよ危い。棚板を爪で搔きむしる音が、がり／＼と聞える。これではならぬと左の前足を抜きかへる拍子に、爪を見事にかけて損じたので、我が輩は右の爪一本で棚からぶらさがつた。自分と尻尾に食ひつくものとの重みで、我が輩の體がぎり／＼と廻る。この時まで身動きもせず



ジャム  
皮をむいだ果  
物に砂糖を入  
れて煮詰めた  
餡

に、狙をつけてゐた棚の上の怪物は、ここぞと我が輩の額を目がけて、棚の上から石を投げるやうに飛下りる。我が輩の爪は一縷のかゝりを失ふ。三つのかたまりが一つとなつて、月の光を豎に切つて下へ落ちる。次の段にのせてあつた挿鉢と、挿鉢の中の小桶と、ジャムの空罐が、同じく一かたまりとなつて、下にある火消壺を誘つて、半分は水甕の中、半分は板の間の上へころがり出す。すべてが深夜にたゞならぬ物音をたてて、死物狂の我が輩の魂をさへ寒からしめた。

「どろぼう」と主人は胴間聲を張上げて寢室から飛出して来る。我が輩は鮑貝の傍におとなしくしてうづくまる。

二匹の怪物は戸棚の中へ姿を隠す。主人は手持無沙汰に、「何だ、誰だ、大きな音をさせたのは」と怒氣を帯びて、相手もゐないのに聞いてゐる。月が西に傾いたので、白い光の一帯は半切ほどに細くなつた。  
(吾輩は猫である)

### 一三 新滿洲の旅

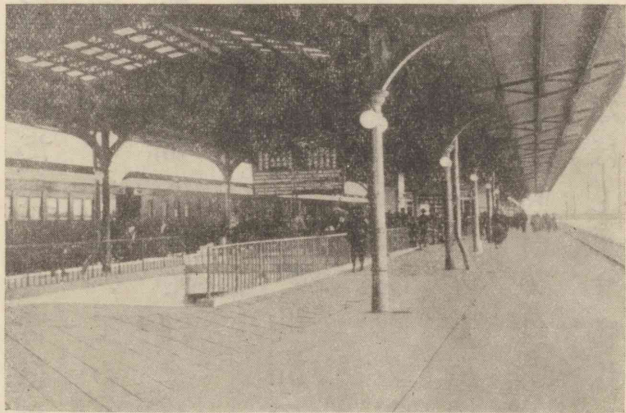
安倍季雄

安倍季雄  
童話作家、山  
形縣の人、明  
治十三年生

朝鮮の京城を夜の七時二十分に出發して、翌日の午前七時十五分に安東に着きました。

ここで、時計の針をきちんと一時間おくらせて、滿洲時間になほします。鴨綠江の鐵橋を越しただけで、滿洲と朝鮮とは一時間違ふのです。

新京  
もとの長春。

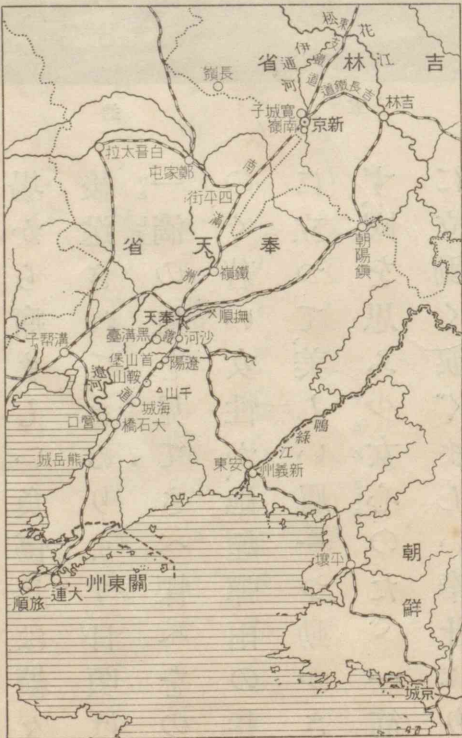


新 京 驛

三十分停車して、税關吏の検査を受け、六時四十五分安東驛を出發、その日の夕方、二十時三十分に滿洲國の首都新京に到着しました。滿洲の汽車の時間は二十四時間制で、午前も午後ありません。

新京は、南滿洲鐵道・東支鐵道・吉長鐵道の會合點で、松花江に注ぐ伊通河のほとりに建てられた比較的新しい都市で、人口は約十六七萬といはれてをります。

滿洲事變に際しては、この新京の近郊でも日本軍と支那軍との衝突が起り、時ならぬ砲聲・銃聲に、曉の夢を破られた在留邦人の驚きは非常なもので、男子といふ男子は結束武装して滿鐵の附屬地警備の任に就き、婦人といふ婦人は取る物もとりあへず病院に駆けつけ、かひなく負傷兵看護の任に當りました。その大部分は、年端もゆか



ぬ少女たちでありました。



軍 進

兵をも感泣せしめました。

南嶺の戰場から、寛城子の戰場から、痛ましい負傷兵は續々後送されてまゐります。日頃は、一滴の血を見てさへ慄へをのく若い女性が、砲煙彈雨の巷に立つて、美しい眉一つ動かさず、國を思ふ少女心のたゞ一筋に立働く涙ぐましい奉仕ぶりは、痛手には泣かぬ名譽の負傷

新しい國都の名に輝く新京をたづねて、その髪黒く瞳黒きナイチンゲールたちを、まのあたり見て、私の心は祝福に満たされました。

春はここにも――。

眼もはるか行けどもくはてしない大廣野を縫うて、汽車は汽笛代りの鐘をがらんくと鳴らしながら南へ南へと進んでをります。車窓から眺める滿洲の民家や風俗もおもしろいが、より多く私の心をつかまへたのは、滿洲名物の親豚・子豚であります。

その親豚・子豚に就いて思ひ出したおもしろい話があります。夕方、親豚の姿が見えないと、牧童はいきなり子豚

の尻尾をつかんで、ぐいと空中に吊しあげる。子豚は驚いて、ぶーくと鳴く。その鳴聲を聞くと、親豚はどんな遠い所にゐても、全速力で飛んで來ます。そして、その子豚を愛撫しながら、今度は親豚がぶーくと鳴く。どこからともなく子豚が續々と集まつて來て、親子揃つて我が家に歸る。豚の母性愛が、おもしろいではありませんか。

奉天に着きました。



奉天驛前

綿をちぎつたやうな柳絮リウジが、空一面に飛んでゐます。清朝累代の墳墓のある所、北陵・東陵に詣でての歸るさ、ここでも事變の當時における日本の若い女性のけなげな活動ぶり、と純情とを聞いて、私は思はず涙ぐみました。極寒零下三十度、鼻の穴さへ凍るといふ滿洲の曠野に、東洋永遠の平和のため、大きくいへば全世界の人類のために、正義の戦を戦ひつゞけて傷つき病める兵士たちを、些かにても慰めばやと、少女たちが日ごとく手づ



負傷兵を慰問する少女



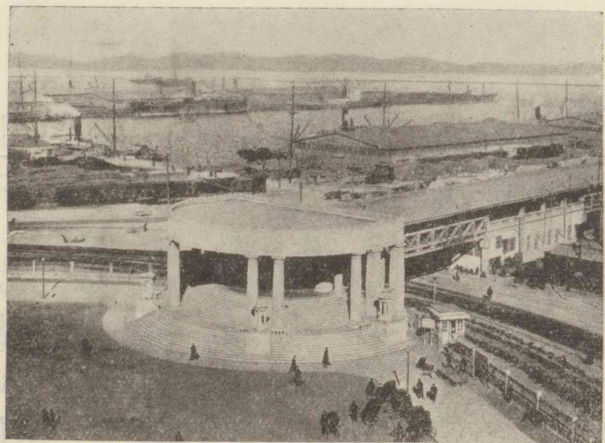
山東  
今の山東省あたり

一宿して八時遼陽を出發、橋大隊長で名高い首山堡や鞍山の製鐵所、馬賊の巢といはれる千山、海城、大石橋などを車窓に送迎して、晝の十二時半、熊岳城驛着温泉ホテルに旅装をぬぎ、驛から二千二百米ほど北へ當る岩山に登りました。

山東  
今の山東省あたり

昔、この村に住んでゐた孝行息子が、志を立て、山東に試験を受けに行つたつきり歸りません。ひとり残つた母親は、一年間、今日歸るか明日歸るか、毎日この山に登つて、渤海を往來する船を見てゐたが、とうとう待ちきれずに死んでしまひました。村人は深くその志を憐み、塔を建てて母の靈を慰めたといふところから、この岩山を望小山

と呼んでをります。渺茫たる平野のはてに、泡立つ渤海の



ベランダ  
露臺

〔禁轉載〕

大連埠頭

海原を眺めて、子を思ふ母の愛の深さを考へさせられました。熊岳城名物の紅梨を買つて大連に着いたのは夕方です。赤い夕日に照らされたヤマトホテルのベランダに立つて、私は遙かに旅順の空を眺めながら、新興滿洲國の輝かしい前途を思ひ、明日たづねる旅順の古戦場を胸の中に描きながら、今この筆を執つてをります。

一三 大島の旅から

大村嘉代子

大村嘉代子  
劇作家、東京  
市の人、明治  
十八年生  
大島  
伊豆七島の一、  
東京府に屬し、  
島中に活火山、  
三原山がある。

前便で申し上げましたやうに、昨晚は嵐でございまして、大島行は思ひとまりまして、今朝、歸らうと存じましたが、起きてみますと、風がすつかりをさまつてをりました。宿の屋根の上まで廣がつた榎えのきの小枝が、ゆふべの風に折られて、庭のそこここに散らばつてをりますのを、少し心細く眺めました。が、からりとした青空に陽がのぼりましたので、また大島へ參ることとなりました。

朝八時、伊東をalmaz時、穩かてございまして、沖に出てみますと、なか／＼の風で、飛魚とびうまが目の前をかすめてすつ／＼と飛ぶのも、あまりよい心持ではございせんでした。小さい和船は沖に出ますほど、高い波の山を越します。あとからあとからと大きい波が頭の上に落ちて來ますので、着物も帯も拭く間がございせん。しまひには、いつそ涼しくらゐの氣持で、顔も頭も潮の洗ふのにまかせました。一行五人、私をのけました外は、皆唇の色を失つて、舟の底に横になつてしまひました。

伊東  
靜岡縣伊東町  
一、伊豆國に在  
る。温泉に散  
らす。大島場  
が、は島泉に  
近。最もここ  
が、距離か渡

元村  
大島の西北部  
にある

爲朝  
源氏、賀西八  
郎と稱した。  
保元の亂に敗  
れて、大島に  
流された。

前掛  
大島の西北部  
にある

それでも、どうにかかうにか、まづ無事にお晝  
頃元村に着きました。ここに落着きました。伊東  
を出ます時は、みんな大いきほひで、三原山にも  
登りませう、爲朝の遺跡もたづねませう、紫陽花  
の咲きつゞく野も歩きませうなどと申しあつ  
て出ましたのですが、海を渡つて宿に着きます  
と、すぐ頭の上にむくくと漂つてゐる三原山  
の煙を見ましても、誰も何とも申しません。  
挨拶に來た宿のおかみさんの驚くほど多い  
髪の毛——櫛卷につかねた自分の髪の毛の重  
みで、生際が薄くぬけ上がつてをります——お

晝飯の給仕に出た島の女の、帯なしで、幅の廣い  
前掛をかけた姿などを見ると、一同少し元氣に



大島の女  
おくと、二階か  
ら見わたす限  
りの木といふ  
木が椿である  
のにまづ驚い

て、散歩に出かけました。

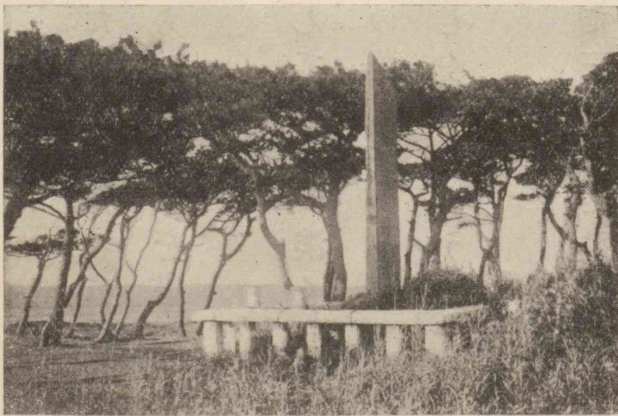
まばらながら軒を並べて、呉服屋もあれば、氷  
屋もございます。道の端には、赤い松葉牡丹の大



きな花が摘まれもせずに見事に咲いてをりま  
す。頭の上に薪をのせて、まつすぐな姿勢で歩い  
て行く女、鎌を腰に、草を積んだ牛を追ふ女、見る  
ものは皆珍しうございますが、素足にはいた宿  
の下駄で踏む砂の熱いのは困りました。爲朝  
の館ぐらの跡はもうございませぬが、近頃海岸に碑  
を建てたと申すので、宿の番頭に案内してもら  
つて参りました。熱い砂を踏んだ足で、冷たい草  
を踏む心地よさに、生きかへつたやうになりま  
して、椿の木の下に山紫陽花の澤山咲いた中を  
通り抜けて海岸へ出ますと、一丈もあらうかと

思はれる石の記念碑がございました。青い海を  
越して遠くに富士が  
見えました。

夕飯後、島のお婆さ  
んが来て、大島節を聴  
かせてくれました。年  
は七十ぐらゐの、島で  
一人二人といふほど  
聲のよい百姓家のお  
婆さんださうでござ  
います。座敷へ参りましても、手拭を頭にかぶ



爲朝の碑

つたまゝで、それでも白扇を持つて拍子を取りながら歌ひました。

お婆さんが歸りましたあとは、銘々に繪葉書を書きはじめました。私もこの手紙を書いてをります。

あたりはひつそりとして、夕月が淡く三原山にかゝつて、暗い椿の木の蔭に牛が鳴いてをります。潮風が強いので涼しく、蚊も少うございませす。

明朝は五時頃に起きて、三原山に登らうと存じます。登山の様子はまた明日詳しく申し上げ

ます。

末ながら皆様へよろしうお願い申し上げます。  
(女流名家書簡選集)

北原白秋

一四 蝶々の旅

北原白秋  
名は隆吉、  
岡縣の歌人、  
治十八年生、  
福詩

湖ははるぐ、

空遠し。

浪はさゞなみ、

日和浪。

南の風に  
おくられて。

黄や、紫や、  
白の蝶。

どこへ行くのぞ、  
數知れず。

すれ／＼わたるへらへら  
今日の風なま。

晝は事なく  
わたれども。

とまるものなき  
浪つゞき。

風はひととき、  
目路めぢのはて。

夕立雲も

湧くものを。

どうせは、神鳴かみなり、

いなびかり。

早よ／＼わたれ、

夜は凄しみい。

蝶々、蝶々、

旅の蝶。

(からたちの花)

茅野雅子  
の歌人、大阪市  
三年生、明治十

一五 薔 薇

茅野雅子

親しかつた友の形見として、薔薇の木を二本いたゞいたのは、考へるともう十年以上前のことです。竹で編んだ小さな屋根のついた門の兩方の柱に添つて伸びた枝が、その屋根の上で花を開くやうになつてゐるもので、樹木は相應にありながら、何の趣もなかつた小さい私の庭も、この薔薇の門一つで非常に風情が増したやうに見えました。それはまだ梅雨の始まつた頃のことでしたから、苔は澤山についてゐたものの、どんな花が咲くかは全くわからない時分でした。

やがてまづ咲いたのは、赤い一重の鄙びた小薔薇でしたが、それから二週間もすると、香の高い黄白い木香薔薇が咲いて、そこに一番近い食堂などは、風の吹きぐあひでは、むせるほど強い香がこもることがありました。私は亡友をしのぶのにこの上なくよい品をいたゞいたのを心から嬉しく思つて、ぜひと枯らさないやうに育てようと、朝夕氣をつけていたはつてやつてゐました。

しかしどうしたものか、赤い薔薇は年々衰へて、黄の木香薔薇だけが勢よく育つてゆきます。油蟲とか甲蜂とか、害蟲に苦しむのも赤い小薔薇ばかりで、はては屋根の上は全く黄色い木香薔薇のみに占領されるやうになりま

した。私は赤い小薔薇を悲しみながらも、好きな木香薔薇の盛んな生長に慰められてゐました。

ところが、私たちは長い間住馴れた市内の家から俄かに郊外の方へ移轉することになつたので、植木屋を呼んで、まづこの二本の薔薇を新しい家の庭へ移させたのでした。

「ねえ、植木屋さん。これは記念にいたゞいた薔薇で、大切にしているんですから、氣をつけて枯らさないやうにして下さいね。」

私は何となく氣になつて、そんなことを植木屋にいひました。

「大丈夫です、奥さん。これを枯らすやうでは私どもも商賣をやめなくてはなりませんよ。」  
紺の半被はちびを着た二人の若者のさういふ返事は、いかにも頼もしげに聞えました。

移轉の混雜も大分片づいた頃、私は庭へ出て、持つて來た植木類を見廻りました。木瓜け・萩は・濱木綿はま・マグノリヤ・楓・椿等の外に、いろ／＼の草花も大概うまく根づいたらしいのに、二本の薔薇だけは全く元氣がありません。特にあんなに元氣だつた木香薔薇の葉が皆白くよれてかさ／＼になつてゐます。私は驚いて近所の植木屋を呼んだのでした。前の植木屋はあまり遠いものですから。

マグノリヤ  
木蓮の一種

植木屋の若者は、ちやうど危篤な病人の診察をする醫者のやうな態度で、薔薇の枝を折つたり皮を剥いてみたりした後、

「もうだめらしいですね。しかし枝を切つて日除を作つてみませう。ひよつとすると生きかへるかも知れませんが。」

さういつて、必要な手當をして歸つて行きました。しかしそれは結局何の役にもたちませんでした。二週間ばかりするうちに薔薇はすっかり枯れてしまつたやうでした。梅雨が來ても、花どころか、青い葉一つ見えないやうになりました。一月ほど経つて見に來た植木屋はいひまし

た。

「もう全くいけませんな。ひとつ根を見ませう。」

掘出された根は、まあどうでせう、白い黴かびが一面にふき出してゐます。植木屋は投出すやうに、

「根を切り過ぎたんですね。これでは到底つきつこはありませんよ。惜しいものですね。こんな古い薔薇はめつたにありません。三十年は確かに経つてゐます。」

といふのでした。亡んでゆくものの價値を今更讃頌してももう及びません。私は友の家で始めてこの木を見た時のことから、十年餘りも美しい色と薫で私たちを楽しませてくれたことを思つて、その朽ちかゝつた根をそのま

ま捨てる氣にはなれませんでした。それですゝまなない植木屋の若者を促して、強ひてその根を別の所へ埋めさせました。追憶の心を葬るやうな心持でした。門は勿論除かれてしまひました。

いつか夏も過ぎ秋になつた或日、私は庭の片隅に咲いてゐる龍膽りんだうの紫にまじつて、淡緑の細長い芽が一本、明るい日ざしの中に風にゆらめいてゐるのを見つけだしました。何だらうと思つて近寄つて見ると、嬉しいではありませんか、朽ちはてたと思つた木香薔薇の根から、新しい芽が生まれたのでした。

「まあ、薔薇が蘇つた。」

私は思はずかう叫ばずにはゐられませんでした。あゝ、もしあの時この根を捨てておいたらどうであつたらう。私は人間の知識の及ばない自然の大きな生命力に觸れたやうな氣がしました。

私はいひ忘れてゐましたが、年々に小さくなつて、見る影もないやうになつてゐた赤い小薔薇は、不思議にも移轉してから元氣を回復しはじめたやうです。この薔薇と、生きかへつた黄色い木香薔薇とで、またあの薔薇の門を立てる日が早く來ればよい。私はそれを今から待望んでゐます。

〔禁轉載〕

佐藤紅緑

名家は治六、作  
生人、青森縣の  
ナポリ、明七  
ナポリ、灣に臨  
み、ベスビオ  
火山と相對し  
て、美しい風  
景を眺むる  
から、ナポリ  
は「死ね」と

一六 パナマ帽子

佐藤紅緑

私はイタリーのナポリに遊びました。ちやうど折よく日本人の道づれを得ましたので、夕飯をとらうと山の上の料理店へ参りました。暑いイタリーではあり、夏のこととて、私がかねて用意のパナマ帽子をかぶつてゐました。料理店はナポリの町を一目に見おろす眺望のよい所で、そこには觀光客が幾組も來てゐました。中に婦人の組もありました。これは英國人なので、英語で語りあつてゐました。私たちはその近くへ陣取りました。すると、右の婦人たちは私たちの方を見て、一度に噴きだしました。私は、



あの婦人たちは日本人を見慣れないから笑つてゐるのだらうと思つてゐました。ところが暫く経つと、貴婦人の一人が私たちの方へ指をさして笑ふのです。失敬な女だと憤慨してゐると、指さしをするものは一人だけでなく、二人になり、三人になりました。一體、誰を指さすのかと私たちの方でも注意して見ますと、どうも私の方へ向かつてゐるらしいのです。

私たちの案内者である若いイタリヤ人はひどく憤慨して、給仕人に何かいひました。イタリヤ語だから私にはわかりませんが、給仕人も困つてゐたらしいのです。とゞのつまり、席を變へたらよからうといふことになりました。

た。そこで、私は一體、何をあの連中が笑つてゐるのですかと質問しましたら、「あなたの帽子を笑つてゐるのです。」と答へました。いかにも、さういはれると、暑くてもパナマの帽子をかぶつてゐるものは一人も見つたことはありません。パリでも麥藁はいくらもありますが、パナマはありません。

この事があつてから後も、私は一種の反抗心をもつて、どこへ行つてもパナマをかぶつてゐました。パリへ歸ると、ナボリのことは次第に忘れてゐました。私は或日、オペラの通を散歩しました。無論、私の足どりですから、それは實にゆつくりしたものです。すると、私のうしろで、八つか

九つぐらゐの女の兒の聲がしました。

「お母さん、この人は變だわね。」

お母さんらしい聲がいひまし

た。

「そんなことをいふものぢやあ

りません。それ、この蠟人形を見

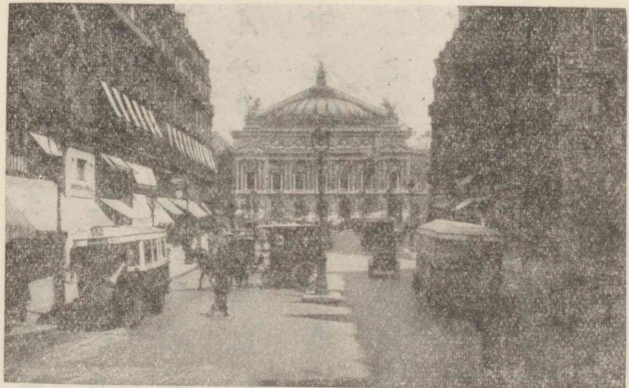
て御覽。」

聲がやみました。すると、暫くあ

つてまた、

「お母さん、この人は變だわ。」

私は私のことではないと思つてゐました。すると、三た



前 ラベオのリバ

び目にはつきりと聞えました。

「だつて、この帽子が變ですもの。」

「は、あ、私の帽子のことだな——と私は思ひました。同

時に、ナポリの一件を思ひ出しました。どこへ行つても、こ

の帽子で苦勞する——かう思つてゐると、若い母の聲が

聞えました。

「どんな帽子をかぶつても、どんな着物を着ても、それは

その人の自由です。何もお前の知つたことではありま

せん。」

子供は黙りました。十歩ばかり来ると、またいひます。

「だつて、をかしたな帽子だわよ、お母さん。」

「いけません。そんなことをいふものぢやありませんよ。お前は自分のことを考へればいいのです。なぜそんなに他人の自由を氣にするの。」

自由々々といふ言葉をくどいほどいつて聞かせてゐます。それは日本によく見るやうな、母親ががみくくと叱りつけるのでなく、箸をもつてくゝめるやうに靜かに靜かに説くのです。

これがフランスだ——と私は胸のうちでいひました。何ともいへない微笑が口の端に溢れました。そして自由自由と繰返しました。

（東西婦人觀）

黒田初子

登山家、東京市の人、明治三十六年生

秩父 秩父連山、埼玉縣の西部にある

一七 山を懷ふ

黒田初子

いはゆる日本アルプスや秩父に入つたことはなくとも、誰しも家の裏山や、小高い岡に登つたことがあらう。すると、平地にゐた時とは全く違つた清々した氣持になり、今まで見えなかつた遠くの山々が、美しい線をひいてゐるのに驚くことだらう。また、同じ大空の下にゐるとは思へないくらゐに、雲の往き來に目をとめることだらう。そして、登る時には少しは足がだるくとも、「あゝ登つてよかつた。」と勇みたつて下ることだらう。

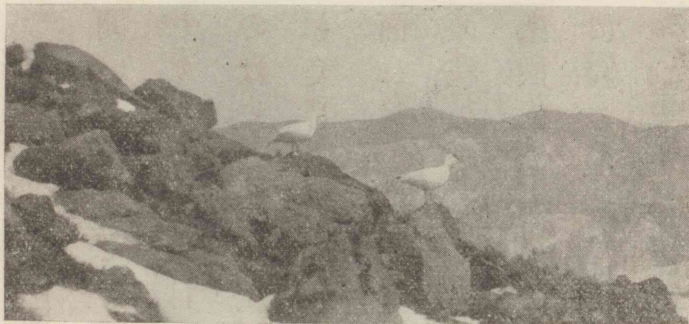
まして海拔二千米から三千米の山に登つて見ればど

黒木  
常緑針葉樹を  
いふ。

うだらう。これはまた裏山や丘の比ではない。千古不伐の大森林の晝なほ暗い中を歩む時の静かさは、全く都會の騒音を忘れさせ、頭の心こゝろから休まる思がする。さういふ林の中の小徑は軟かて、ふか〜と草鞋の足への何ともいへない優しい觸感を樂しませてくれる。もしまた雨が降つてゐれば、體のぬれるのを厭ふより先に、美しく清められた木々の綠に新たな美しさを見るだらう。黒木の森を過ぎ、白樺の生え



白 樺



か。何もわるさをしないで、親子睦ましく岩蔭に遊ぶ姿は、

雷

た山路にかゝれば、低い所では見られないこの白くて艶消しのハイカラな木は、そゞろに都の可憐な少女の姿を思ひ出させる。

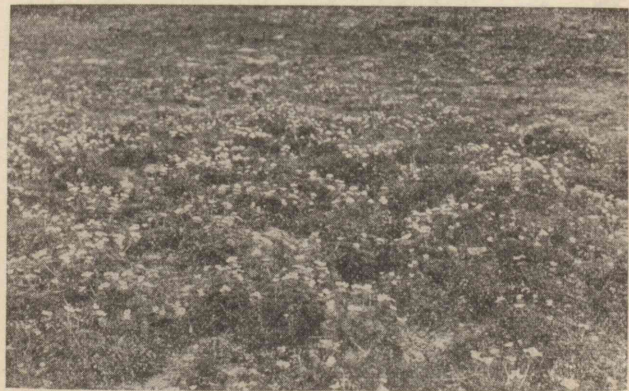
鳥

これより高い所になれば、偃松ほひまつがある。その下からよち〜出て來る雷鳥のかはいらしさ。この鳥に石をぶついたり、その首をひねつたりする人があつたといふ昔の話を聞いた時は、どんなに驚いたことだつた

どんなにか山人の心を軟げてくれるものだらう。

私は花が好きなので、お花畑と聞いただけでも嬉しくなる。がつしりした岩に、目もさめるばかりのはでな花が、風に揺れてゐるのも美しいが、五色が原のやうに、一面に足の踏所もないほどに無数の花の咲いてゐるのは、この世の樂園としか思はれない。また高原に寝ころんで、何だかよい薫がすると思つて氣をつけると、耳のまはりに一ぱいに鈴蘭が

五色が原  
日本アルプス  
に屬する立山  
の南方にある  
高原



お花畑

立つてゐる時など、何と嬉しいことだらう。

かうした女性的な美しさもさることながら、天を衝く



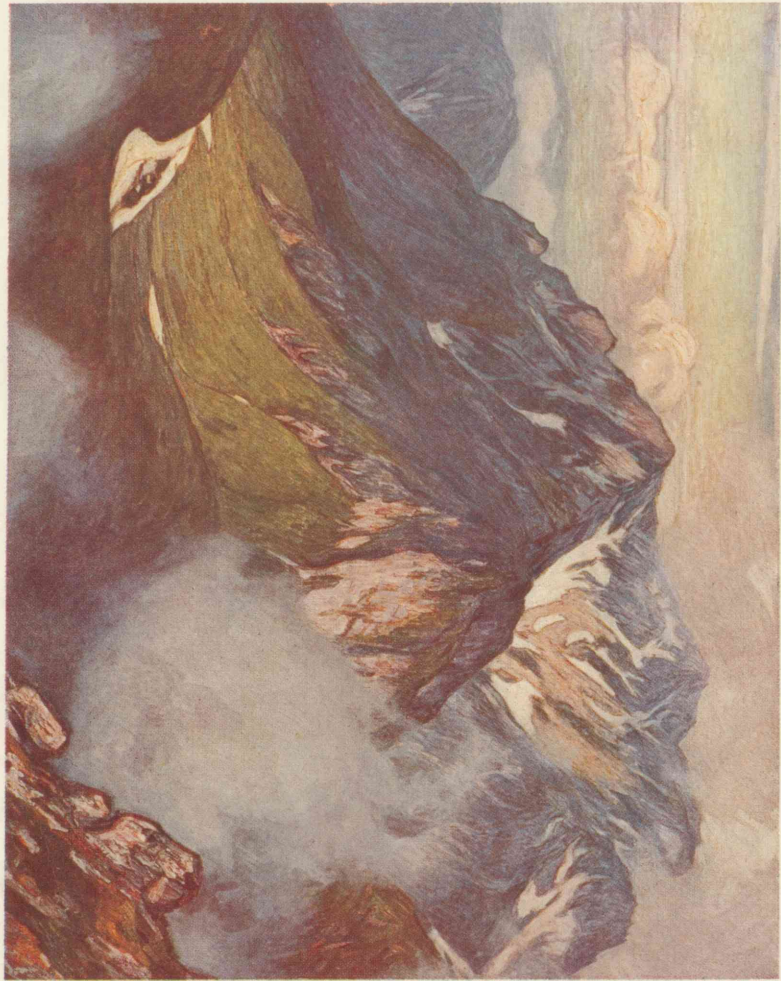
岩登り

巨大な岩峰や、風雪にさらされた岩肌や、魔物のやうに口をあいた雪溪の龜裂は、また一種格別な魅力をもつてゐる。どこから登るのか殆ど手

のつけやうのない岩壁が、私どもの前にあらはれたとしたらどうだらう。山人の胸は、その岩峰が峻険ならば峻険なほど高鳴るのだ。綱を肩からおろす手には、眞剣な力が

綱  
急な危険な岩  
を登る時  
に用ひる保

漲り、登路を探さうとする目は、隼はやぶさのやうに鋭く光るだらう。そして一度、その岩壁に攀登るや、一舉一動はすべて尊い生命を的にしての動作である。ぐいぐいと手がかりを得て登るのは、實に愉快の限りである。そして自分の足場のよい所へ落着いて、親しい友の登攀を確保し、お互に一條の綱で結びあつて、生死を共にする。山で結ばれた友情は、たとひ一緒にゐた日が短くとも、どれだけ深いものかわからないといはれてゐるが、この綱で結びあつた仲間、同じ山友だちの中でも一層の親しみを感じるものである。そして下から見上げて武者振ひさせられた岩峰の頂に立つた時の氣持は、全く他のどんな遊でも感ずるこ

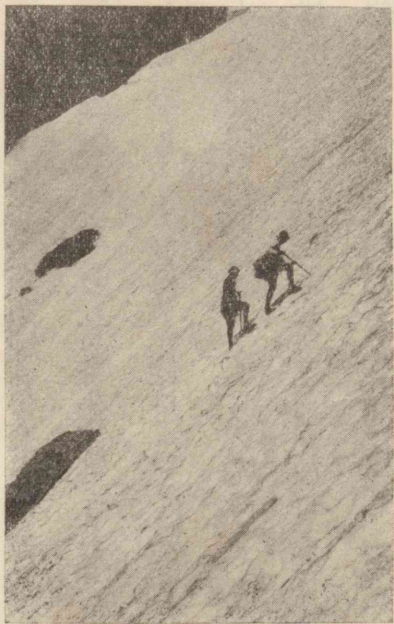


穂高 嶽 吉田 博 筆

ピッケル  
氷雪上に足場  
を切つたりな  
どする登山用  
の小型な鶴嘴。

との出来ない涙ぐましい喜悅に満ちたものである。

岩はかうした緊張を私どもに與へてくれるが、氷雪もまた同様である。すべり易い氷や雪の急坂を登るのは、手がかりがないだけに一入不安である。秘藏のピッケルで足場を切り、下ものぞけないやうな急坂を横切るのは、全く眞劍そのものである。また雪溪の龜裂に出會つた時も、どんなに心を遣ふことだらう。どうしても飛越すことの出来ない魔の



雪 溪

口が、てらくくと蒼く透きとほつて、底の知れない溝を作つてゐる。數貫の荷を負つて早朝からひたすらこの雪溪を登りきらうと一步々登つて來た一行が、どうしてこの魔の口に追返されて退却する氣が出よう。どうかして渡りたいとあせり、長い龜裂のうちの一番狭さうな所を探すもどかしさ。さうしてゐるうちにも、焼けつくやうな太陽の熱は氷を溶かして、一層口を大きくさせるかどさへ感ぜられる。私は劍嶽ニミの小窓まどの雪溪を登つた時、かういふ目にあひ、三人の人間と三つの荷物が全部渡るのに小一時間もかゝつた。その間は夢中で、全く我を忘れてゐた。山の豪雨や落雷の凄さも、到底の下界では考へも及作

劍嶽  
立山群峰中の  
一峰で、富山  
縣にある。  
小窓  
劍嶽の頂稜の

い。その他、冬の登山で經驗する極寒に對する忍耐や、雪崩ななれに遭ふまいとする心づかひなどを思へば、山登りは、たゞ楽しいからするとか、美しい景色だから行くといふにはあまりに大きな苦痛が伴ふ。二百米もあるやうな斷崖から落ちて、全身に數十箇所の傷を負うた人が、二箇月と經たないうちに、同じ山に行かうとしてゐる話を聞いたこともある。また、千米も雪の傾斜スロップをすべり落ちたのに、一行に怪我のないのを知つて、すぐその急坂を登り、再び雪崩で五百米も押されたのに少しも懲りずに行く人もある。山に數回行つた人で、よくあの時無事だつたとか、もう一足ですべりがとまらなかつたら、生命はなかつたとか



〔禁轉載〕

山本一清

天文學者、理  
學博士、京都  
帝國大學教授、  
滋賀縣の人、  
明治二十二年  
生

いふ經驗を持たない人はないと思ふ。それでも決して懲りないで、精出して行くのだから、山といふものは不思議に人をひきつける力があるものに違ひない。

一八 星

山本一清

天文家「よく晴れてゐますね。」

少女「ほんとによい晩です。一きれの雲もない、澄みきつた空ですね。それに、月もよい形をしてゐます。星も澤山見えますが、一體、この天にある星はいくつほどあるのでせうね。」

天「今夜は月がありますから、小さな星はよく見えません

天「が、それでも、今かうして見えるだけで凡そ一千はあるでせう。御覽なさい、あの南の方は星が少いでせう。月があるからなのです——。しかし、こちらの北の方を見て御覽、いくらか星の列び方が多いでせう。月さへなければ、今夜のやうなよい晩には、三千の星が見えるのです——。」

少「三千ですつて。さうでせうか。私には三千や四千どころか、別に數へてみたことはありませんが、十萬も百萬も千萬も、天には星があるやうな氣がします……。」

天「ほんとにね、氣持だけはそんな氣持がしますが、論より證據、私は星の數を數へることが度々あるのですよ。勿

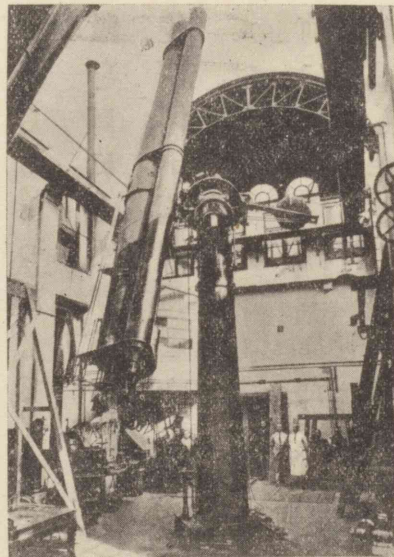
論、單なる暇つぶしではなく、或必要のために。——さうすると、人の眼で一時に見える星の數は、誰が見ても、まづ大體三千ときまつてゐます。尤も正確なことをいへば、今この場所のやうな、あちらに、あんな大きな建物があつたり、こちらに、こんな高い樹があつたりしては、せつかく見えるはずの星の一部を隠してゐますから、いけません。もつと四方が開けた野原の中にも、立つて見れば、天全體に、普通の眼で三千ぐらゐるは見えるのです。」

少「三千ぐらゐてせうか。」

天「三千が少いと思ひますか。三千は多い數ですよ。あなた

は、實際、物の三千といふ數を目の前に見わたしたことがありませんか。今は私どもの住む社會が大きいものですから、ちよつとしても、萬や億といつたやうな大きな數を口にします。あの市の人口が何十萬だとか、軍艦一隻が何千萬圓だとかねえ。しかしこんな大きな數を、口では平氣でいひもしますが、實際それだけの數を眼の前に見せつけられたら、それは、大びつくりですよ。——しかしそのびつくりする方が本當なのでせうね。たゞ口先だけでいつてゐる人は、實は言葉で發音してゐるといふだけのこととて、本當の物の數の觀念などもつてゐやしませんよ。」

少「しかし望遠鏡で見れば、もつと澤山見えるでせう。」  
天「え、さうですとも。人の眼に見えない星も、望遠鏡ならば澤山見えだしますから。」



東京天文臺の望遠鏡

少「一體、天には總計いくつの星があるのです。望遠鏡を大きくすれば、限りなく澤山見えるのですか。」  
天「まあ大體、さう考へておけばよろしい。雙眼鏡で見ただけでも、肉眼で見た星の五倍や六倍は確かに見えますよ。直徑十糎の望遠鏡

東京天文臺  
東京都府北多摩  
三鷹村にあり  
つて、このあ  
望遠鏡は東洋  
一の稱がある

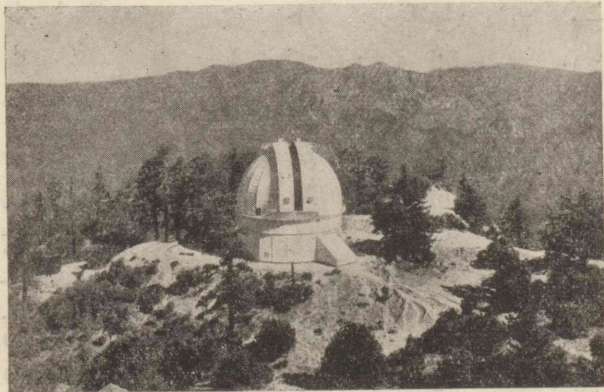
ならば、既に百萬以上の星が見えますし、世界第一の直徑百何糎といふ望遠鏡ならば、少くとも五六千萬の星が見えます。」

少「星は一體、どんなものですか。」

天「星は一つく、太陽と同じやうなものです。尤も、水・金・火・木・土の五星などは地球の兄弟分ですが、それでも木星は地球の十倍、土星は九倍以上の大きさがあります。しかし大抵の星は一つく、太陽と同じ實力をもつてゐるものなのです。たゞ單に距離が遠いといふ事情のため、實力は非常にありながら、一つく、の星はあんな微かな光で輝いてゐるのです。」

ウイ  
イル  
ソン  
天  
文  
臺  
カリ  
フォル  
ニア  
州に  
あり、  
世界  
一を  
誇つ  
てゐ  
る。

少「あゝ大きい。天文家は、何に就いても、すぐ大きなこ  
とを仰しやる。私はいつも聞  
くたびごとに、『本當なのだら  
うか。』とひそかに疑ひたくな  
ります。この天に列ぶ大星も  
小星も、すべて一つづつ、あの  
大きい太陽と同じものであ  
るとは、何から割出したこと  
か知りませんが、随分思ひき  
つたいひ方ですね。」



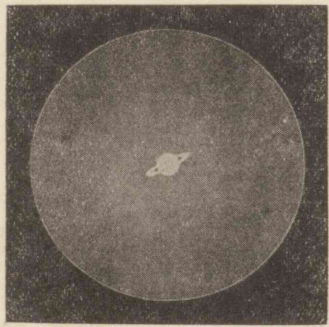
ウイソルソンの天文臺

天「はゝゝ、思ひきつたといひますか。しかし私どもは決し

て誇張したり、おどかしてゐるのではありませんよ。す  
べて今の學問は、證據がなければ、どんな些細な事でも  
決していひきれないのです。單なる想像は、今日の科學  
には大禁物です。それだけ、科學の結論には信用がある  
はずなのです。太陽と星とが同じ實力のものであると  
いふ場合に、これほど違のあるものが、どうして……と  
びつくりして下さるよりも、むしろ、等しいものをこれ  
ほどの違に見せる距離そのものの大きいのを、改めて  
びつくりして下さい。」

少「なるほど、びつくりの仕方まで教はらなければなりま  
せんね。しかし私はこんな話を聞いたたり、考へたりしま

すと、何だか、この自分といふものが、いかにもつまらないもののやうに思はれてなりません。小さな世界に生きてゐて、毎日、限られた場所に限りある力をもつて、まことに些細なことに心を奪はれながら生活を續けてゐる。お互に同じやうな人間同士であればこそ、笑つてもみたり、怒つてもみたり、喜んだり、泣いたりやつてゐますが、一旦空を仰げば、そこには大きな天空が私どもに臨んで、別に言葉はありませんけれど、これを見よとばかり、私どもを壓迫してゐるやうに見えます。時の流といふことにしてみたところで、私どもの一生は、せいふ、百年、この百年を萬倍、か億倍かしたものが、我



望遠鏡で見えた星

が地球の壽命だと、あなた方は仰しやるのですが、そのまた地球が、太陽や外の星々の附屬物に過ぎないとしてみれば、あの天に見えてゐる微かな星一つにしても、全く想像することの出来ない永い生命をもつてゐるのですねえ。天「いや、さうまた悲觀したものでありませんよ。そりや、いかにもあなたのいはれる通り、宇宙の廣大無邊に比べてみれば、人一生の生命ははかないといへばはかないに相違ないですが、それだからといって、私どもはこの大自然の前に、徒に屈從してゐるべき

ものでもありませんよ。天は大きなもの、時は無窮なものとはかり考へてみれば、人の一生はまことにつまらない、何のために生きてゐるのかと歎ぜられることもありませうけれど、私の考へるところは少々違ひますね。天體の形だけを見て、おどかさるのでなしに、學問をして、あの天體の中に祕ひそかれてゐる大きな意味を見出だす時に、そこにもはや驚きや悲しみはありません。例へてみれば、あの大きな天體の一つ／＼が毎日どんな運動をしてゐるか、この一つの問題を考へただけでも、小さなこの人間一人々々が、観察と努力とによつて、天體運動の真相を看破ることが出来るといふことは、こ

れは實に人間の喜であり、誇ではありませんか。」

（天文と人生）

一九 螢

前田夕暮

前田夕暮  
歌人、神奈川県の人、明治十六年生  
透  
作者の息。

私は久しぶりで、透とほと二人で野の林に行つた。そして、その林の傍の青芝原で、二人で相撲をとつて、冷たい芝の上をころび廻つた。それから青原を夕日に横切つて家に歸つた。子供は片手に草の葉つばや草の穂を一にぎり、私は櫟の枝を一枝持つて來た。二人の體は草の香にしみてゐた。

夕餐を濟ませて、子供は蚊帳の中の小さな寢臺の上に

まろぶと同時に、もう安心して寝てゐた。私は書齋で手紙を書いてゐた。

すると、妻が得意さうに微笑しながらはいつて来て、「よいものを見せて上げませう。」といふ。

私は妻の方を見た。妻は何か大事さうに握つた右手を、左の手で更に蔽ふやうにしてゐる。私はちよつと好奇心をそゝられた。何だらうと思つた。妻が静かに開いた掌の中には、思ひも及ばぬ螢が青く光つてゐた。私は確かに驚かされた。

「どうしてか蚊帳の中にもました。」と妻も驚いてゐる。ここに引越して来てから約二十日間も経つ。しかし私はこ

こらに螢の光つてゐるのを見たことはなかつた。また螢がゐるやうとは思ひも及ばなかつた。しかも、それが庭の草にゐたとか、空を低く流れてゐたとかいふのなら、あ、螢がゐる。くらゐにしか驚きもしない。たゞそれが蚊帳の中に光つてゐたといふので驚かされたのである。まさか蚊帳の中で孵化されたわけでもあるまい。いかに私たちの家が小さいとはいへ、螢の故郷にならうとは思はれぬ。私は妻に、子供の着物を寝まきにどこで着換へさせたかと尋ねた。妻は直ちに、

「蚊帳の中で着換へさせました。」といつて、少し眼を輝かせた。そして二人は、野の草原に小犬のやうにころんで來

た子供の着物に螢がついてゐたのだらうといふ暗示を同時に受取つた。私たちは静かな敬虔な心になつて、じつと妻の掌にはつてゐる螢を凝視した。自然の小さな恩惠を感謝しないでほゐられなかつた。

妻は庭に降りて、青芝の中に螢を放した。螢は露しとどな草の葉の中で、時折涼しげに光つてゐた。その都度、草の葉が青く透いて見えた。

私も庭に出てゐた。空には白く天の河が流れてゐた。「もう秋だね」と私はしみじみとした心になつて、竹の涼臺の上に腰をおろして、榛はらの木の上の空に視入つた。

(綠草心理)

芳賀矢一  
國文學者、  
博士、  
昭文  
二年の  
人、  
歿。

二〇 我が國の家庭

芳賀矢一

小さい兄や姉が、弟や妹を背負つて道端に遊んでゐるのは、我が國ではどこへ行つても見受ける事であるが、西洋では決して見られない。それを始めて見た或外國人が、「何といふかはいらしい様子であらう。ここに日本の美しい國風が見える。」

といつて、感心したさうである。すなほに親のいひつけを守るのは、日本の子供の美德である。兄や姉が自分よりも小さい弟や妹をかはいがつて世話をするのも、日本の子供の美德である。世話になつた弟や妹が、兄や姉を大切に



するものも、日本の家庭の特色である。この西洋人は、詳しくは我が國の家庭の内部を知らなかつたのであらうが、道端の子供を見て、我が家庭の美德「父母ニ孝」「兄弟ニ友」の一端を認めることが出来たのである。

父母の子を愛する情は東西共に變りはないが、日本の家庭では殊に子供を大切にす。家の貧富貴賤によつて、生活の上にはそれ／＼の差別があつても、一體の風習は子供を大切にす。子供は父母の寶といふのみでなく、家の寶として尊重される。子が生まれた時の父母の心は、家の後繼が出来たのを喜び、家のます／＼繁昌してゆくのを祝ふのである。親族も朋友も皆同じ心で祝賀するので

ある。七夜<sup>しちや</sup>までのうちに名をつける。行末は立派な人になつて、御國のためにもなれ」と、祖先の名に因<sup>よ</sup>んだり、めでたい語などを選んだりして命名する。三十二三日目には産土神<sup>うぶつちのかみ</sup>にお宮参をして、誕生したことをお知らせする。三つ、五つ、七つとだんだん成長すれば、七五三の祝といつて、その年々の十一月にお宮に参詣する風習もある。男の子の袴着の祝、女の子の帯の祝、父母はひたすらその子の成長を楽しむので



祝の三五七

ある。

三月三日の雛祭は女の子の節句、五月五日の端午は男の子の節句、一家中の歡喜は子供たちのために傾けられる。美しい雛人形、勇ましい鯉幟、かういふ楽しい日は年々に繰返されるのである。盆やお歳暮の贈物にも、父母は子供たちを喜ばせようと苦心し、親類知友からも、お子様へと心をこめた品物を贈る。我が國の都市ほど玩具屋の多い所はないといふのも、小さい國民をかはいがる國風の盛んなことを證明するのである。

我が國の家庭には、お父さんも、お母さんも、お祖父さんも、お祖母さんもいらつしやる。日本の子供は父母の慈愛

本居宣長  
江戸時代後期  
の國學者、享  
和元年歿。

の外に、祖父や祖母の愛をも受ける。祖父や祖母は孫をいつくしんで老を慰める。家の中には神棚があり、佛壇があつて、先祖の位牌を祀つてある。我が國の家は先祖からの家で、先祖と一緒に住んでゐて、だん／＼と子孫に傳はつてゆくのである。家には家の系圖もあり、先祖から傳はつた品物もある。新しい家や別家した家には、さういふものがないところもあるが、本家にさかのぼり、源を正せば、皆それがある。家には家の紋もある。

あゝはゝは我が家の神わが神と心つくして  
いつけ人の子  
と本居宣長大人は歌はれた。父母は子等を家の寶と思ひ、

子等は父母を家の神とあがめるのが、我が國古來の道である。親の親の世から傳へて來た道である。親しい懐かしい親愛の情に、貴い有難い敬愛の情が湧いて、父母に對しては神に對するやうなつゝましやかな心持になるのである。それ故、言語動作にもそれが表れて來る。外國の家庭では親子夫婦兄弟姉妹の間の言葉遣ひはすべて對等であるが、家の神と仕へまつる父母に對しての言語は、もとより別でなければならぬ。先祖と同居してゐる我が國の家庭では、目上に對する言語と、目下に對する言語とに明らかな差別がある。親代りに世話をし、いたはつて下さる兄弟に對しても、敬語を使はなければならぬ。兄弟は飽く

まで幼少な弟妹を憐み、弟妹はどこまでも兄弟を目上の人とあがめ、兄弟仲よくして父母に仕へ、父母の心を慰めて、ここに美しい家庭が成立つのである。父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和する家庭が存立するのである。西洋人は、日本は子供の樂園である。』といつてゐる。日本は子供をかはいがる國である。』と西洋の讀本にも書いてある。我等がこの國に生まれたのは、我等の幸である。

### 三 優しい秋

與謝野晶子

誇りかな春に比べて、  
優しい、優しい秋。

與謝野晶子  
歌人、詩人、  
評論家、大阪  
府の人、明治  
十一年生

目に見えない刷毛を

秋は手にして、

日蔭の土、

風に吹かれる雲、

街の並木、

茅の葉、

葛かづらの蔓、

雑草の花にも、

一つくゝ似合はしい

よい色を選んで、

まんべんなく、こまぐと、

みんな彩つてゆく。

御覽なさい、

その畑に並んだ、

小鳥の脚よりもきやしやな

蕎麥の莖にも、

夕焼の空のやうな

美しいえんじ臘じ脂じ紫さき……

これが秋です。

優しい、優しい秋。

(晶子詩篇全集)

楠山正雄  
作家、翻譯家、  
東京市の人、  
明治十七年生。

三 寓 話

楠山正雄

一 四重奏

猿が、山羊と驢馬と、それから熊までも仲間に入れて、絃樂四重奏團をつくることにしました。そこで、バイオリンを二挺と、チェロと、大きなダブルベースまでも買ひこんで来て、科トキの樹の蔭の草原に集まつて、ぶう／＼始めました。さあ、一ばん私たちの音楽で世界中を酔はしてみせよう。」



チェロ  
バイオリン系  
の大きな絃樂器  
ダブルベース  
やはリバイオリン系で、チェロよりもまだ大きな絃樂器

ところが、樂器はどれもこれもたゞきい／＼ぶう／＼騒々しく鳴るばかりでありました。まあ、待つて下さい。どうも組合せが悪いやうだ。」と、餘計眞赤な顔になりながら猿がいひました。熊さん、あなたはベースを受持つて、驢馬さんのチェロと向かひあつて下さい。私は山羊さんと二人バイオリンに廻らう。さうだ、これでいい、今度こそ山も森も躍り出すに違ひない。」

いふまゝに場所をかへて、また始めましたが、相變らずがあ／＼ぶう／＼うるさいばかりで、いつまで経つても、一向音楽らしい調子に響いては來ませんでした。は、あ、わかつた。」と、今度は驢馬が口を出しました。これはどうし

ても四人一列に並ばなければ、本當の四重奏にはならな  
いよ。」

四匹の動物はそこでまた一列に、それこそ學校の生徒  
のやうに整列して、一齊にぶう／＼始めましたが、やはり  
だめでした。みんなは、じれて、のぼせかへつて、とう／＼喧  
嘩になりました。

その時、その樹の上に飛んで來た鶯がいひました。音  
樂家になるには、何よりも手が利いて、感がはたらいて、そ  
の上、耳がよくなければだめだ。あなたがたが縦に並ばう  
と横に組まうと勝手だが、それだけで音樂家になれはし  
ないよ。」

本巻二 幸福の訪問

幸福はいつも王様や貴族の立派な御殿にばかりお客  
に行くとは限りません。それは氣が向けば、貧しい小家の  
窓をも、にこ／＼しながらのぞきこんで、氣軽く、「今日はど  
うです、暫くお客においてもらへませんか」といふことも  
あるのです。だが、お互にさういふうまい時を逃がさない  
やうにしなくてはなりません。幸福の訪問は人間の目に  
見えないし、お客に來てゐる間もごく短くて、どうかする  
と、五分か十分で歸つてしまふこともあるからです。その  
僅かな間でも、幸福をお客様らしく大切に扱つたお禮に  
は、それから何年もよいことが續きます。その代り、その機

會をうつかりとり逃がしたら、もうめつたに二度と幸福の訪問を受けることはないでせう。

都の町はづれに古ぼけた一軒の小家があつて、そこに貧乏な三人の兄弟が住んでゐました。何をやつてみてもだめだ。幸福に見はなされたのだ。三人はてんぐにかういつて、いつも幸福を怨んでゐました。

三人がいつまでも不幸でゐたので、幸福も氣の毒になりました。そこで、元氣をつけてやらうと思つて、或年の夏そつと三人の小家を訪問しました。そして夏ぢゆうずつとお客になつてゐました。

本當に夏ぢゆう、幸福はそこにゐたのですよ。

さて、この珍しく長い逗留の間に、三人の兄弟たちの運命にもお互に隔りが出来ました。

上の兄は貧しい小賣商人でしたが、幸福がお客に来てゐる間、せつせと商賣を勉強しました。勉強して商賣をすればするほど、お金がまうかつて、とう／＼今ではこの國に誰知らないもののない大金持になりました。

次の兄はお役所に勤めてゐました。幸福がお客に来てゐる間、この兄は毎日の暑さにもめげず、せつせと仕事を勵みました。そこで一番身分の低い書記からだん／＼出世して、とう／＼一番上の大臣にまでなりました。今では、大きな樹や、廣い庭のある屋敷をいくつももつて、大勢の

人に尊敬されてゐます。

ところで、末の弟はどうしたといふのですか。無論、幸福はお客に来てゐる間、この弟のためにも、それは寝る暇もないくらい働いてやつてゐたのです。

ところが、その夏ぢゆうこの弟は毎日ぶら／＼晝寝をして、そのあひまに蠅ばかりとつてゐました。この弟はこれまでも、蠅をとるのが格別上手であつたかどうか知りません。とにかくその夏の間だけは、それこそ幸福が側についてゐるおかげでせうか、それは百發百中といふやうに、手をあげれば必ず一匹の蠅がとれました。

さて、かういふわけで、してやるだけのことをして十分

満足したお客さまは——幸福は、或日秋風がさそひに來ると、氣輕につれだつて、どこか遠方へ旅に出て行きました。

ところで、前にもお話したやうに、この後、三人兄弟の二人まではだん／＼運がよくなつて、お金持になり、大臣になつて、幸福の訪問を心から感謝してゐます。たゞ一人、末の弟だけは、自分一人幸福の訪問を受けなかつたといつて、相變らず貧乏しながら幸福を呪つてゐます。

でも、幸福は一夏ぢゆう汗みづくになつて、一緒に蠅を追つてやつたのですのに。

〔採轉載〕



西村眞次  
考古學者、  
早稲田大學教  
授、  
三重縣の  
人、  
明治十二年  
生。

### 二三 時計の歴史

西村眞次

昔の人間だつて、決して暇でく、仕方がなかつたわけではありません。否、今日の人よりももつと忙しかつたか知れませんが、男は弓矢を持つて、山や森やへ狩に出かけます。一日中歩いたつて、さう澤山獲物があるわけではなく、日暮前にやつと一頭の鹿を捕つて小屋へ歸つて來ると、その角を切り、皮を剥ぎ、四脚を切り、さて肉を切取つて、それを焼くなり炙るなりして食べるのです。女は女で、一日中小屋にゐて、子供を育てたり、石鏃を作つたり、皮衣を作つたり、水を汲んで來たりして、男の群の歸つて來るのを

待つてゐます。狩から男たちが歸つて來ると、その獲物を料理して食べさせなければなりません。男たちはまた附近の山から枯木や枯葉を集めて來て、肉を焼く火にくべなければなりません。明日の狩の用意もしなければなりません。かうして男も女も、しなければならぬことが澤山ありましたから、たとひ仕事は單純であつても、忙しいことは今日と違がなかつたと思はれます。

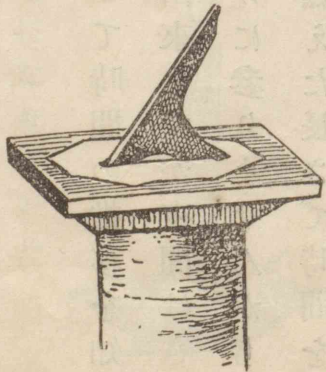
忙しければ時間が惜しくなります。一體、いつ頃から時間といふ觀念が出て來たか、はつきりしたことはわかりませんが、どんな野蠻人でも、夜が明けはじめると、東の空が白みそめて太陽が東の方に昇り、日暮にそれが西の方

に落ちることを認めないではゐなかつたでせう。注意深い人々は更に、太陽が昇ると、山の影や木の影や岩の影が地上にさすことに氣づいたでせう。もつと注意深い人々は、その影に長短のあることを知り得たはずです。即ち朝の間は影が長く引き、日が高くなるにつれてだん／＼短くなり、午頃は最も短くなつて、間もなくまただん／＼長くなり、日暮には朝ほど長くなるといふことを認めたと思ひます。

この太陽が昇つて影の長い朝から、太陽が落ちて影の見えなくなるまでが晝で、また影の長い朝が来るまでが夜です。昔の人はそれ故に、一日を分けて晝と夜とにする

といふよりは、晝と夜とを別に勘定してゐたのですが、だんだんに二つを合はせて一晝夜を一日と計るやうになつたのです。

そこで、昔の賢い人は、地の上、或は板の上に棒を立て、太陽に照らされてその棒が影を地の上、或は板の上に落すのを見て、時間を計ることを工夫しました。それが即ち日時計です。原始人は日の出から日の入までを四しきりに分け、第一を六時から九時まで、第二を九時から十二時まで、第三を十二時から三時まで、第四を三時から六時



日 時 計

までと致しました。第一からだんく、影が短くなつて、第二の終には最も短くなり、第三以後はまただんく、長くなるから、第二の終つた時、第三の、始まる時が晝の最中だといふことが知れました。

晝間は太陽が出るから、影を計つて時間の推移を知る



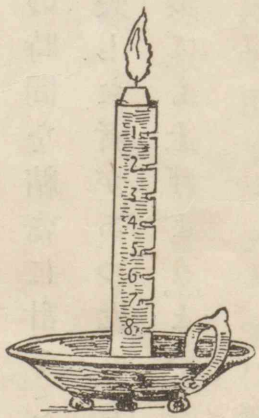
火 ことが出来ませんが、夜間はさう  
繩 いふわけに参りませんから、繩

に火をつけてそれを燃やし、その燃えた長さで時間を計ることにし、凡そ晝間の一しきり即ち三時間にはどれほど燃えるかを知り、結び目を四つ作つて夜の四しきりを知ることが出来ました。後には蠟燭に刻みをつけ、それに

黄河  
支那の北部を  
流れて渤海に  
入る大河

1 2 3 と書いて、時間の経つのを知つたこともあり、また燈明の油の減り方で、夜の時間を計つたこともあり、またしかしこれでは甚だ不精確で、風のぐあひで燈計に燃えたり、塵のぐあひで燈油が少ししか出ないことなどがあつて、日時計のやうに信用が出来ません。どうあつても他の方法を考へなければならぬことになりました。

この必要に應じて現れたのが水時計で、それは支那で發明されたといひます。傳説に従ひますと、今から數千年前に、黄河の岸に住んでゐた伏羲といふ人が、多くの召使



蠟燭時計

を使つて盛んに農業を營み、家畜を飼つてゐました。澤山の人々が面會に來たりして忙しいので、時間割をきめようと思ひましたが、夜の時間がわからないから、いろいろと考へたけれど名案が出ません。そこで召使を集めて、「も



油時計

し夜の時間を精密に計ることを工夫した者があつたら、どんな褒美でも上げよう」と申し渡

しました。

伏羲の召使にリンといつて、日時計を見て鐘を鳴らすのを任務としてゐた少年がありました。或日ばかりとしてあたりを眺めてゐますと、一人の年若い下婢が、水を一

ぱい入れた瓶を頭にのせて自分の方へ歩いて來て、日時計の傍へ瓶をおろして、いろ／＼おしやべりをします。リンは黙つて水瓶を見ると、ひびが入つてゐて、そこから水が一滴づつ露の玉のやうに溢れて出ます。あまりに長くおしやべりをしてゐたので、瓶の水が半分ほども流れ出てしまひました。リンは、はたと膝を打つて、「さうだ／＼」と獨りでほゝゑみました。

その後、リンは瓶の底に近い所へ孔をあけ、中に一ぱい水を張つて、孔から水が洩れるために、瓶の中の水がどれだけ減るかを調べ、煎餅のやうな圓い木の板に柳の細い枝をつけ、それへ同じ距離に色糸を捲きつけて、白・黄・赤・緑

青・黒といふ順にしました。水が減れば減るほど、白から黒までだん／＼と水位が低くなるので、精確に夜の時間を知ることが出来ました。

リンはいよ／＼水時計を完成しまして、さて伏羲の前で實驗をして見せましたら、伏羲は大變に喜んで、望通りの褒美を與へ、それから手厚くもてなすやうになつたといふことです。

この水の代りに砂を用ひたのが砂時計です。それから時計はいろ／＼變化し、遂に今日のやうに錘つゝの重みで齒車を廻し、鋼鐵製のゼンマイの捲きをもどす柱時計や、精巧な機械を小さいケースの中に収めた懐中時計にまで

ケース  
函。

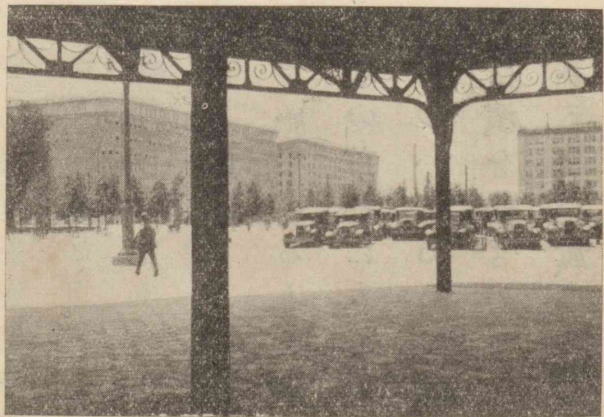
進歩したのであります。

## 二四 大東京

一

急行列車に乗つて、長い旅を續けた人は、誰しも經驗することであらう、列車が大都會に近づいて來ると、一種の興奮を感ずるものである。まして一國の首都に入らうとする時などは、列車そのものまでが勢づいてゐるやうに思はれる。東海道本線の急行列車が、横濱を過ぎてからの快速力は全く格別である。遊園地に翻る日章旗、赤や青の物々しい廣告塔、白い黒い煙を吐く工場の煙突、日を一ぱ

いに浴びた瓦斯タンク、さては人の行き來の繁い橋梁——それ等のごちやく、した風物の中を走り過ぎた列車は、旅人の心をいやが上に緊張させながら、いつか東京の中樞に迫り、愛宕山の放送局のアンテナを左に見つゝ、高架線となつて、薨の海を越え、東京驛の長いプラットホームにすべりこむのである。



東京驛頭

愛宕山  
芝區にある高  
アンテナ  
ラヂオの空中  
線

東京驛の降車口を一步外に出た旅人の目をまづ驚か

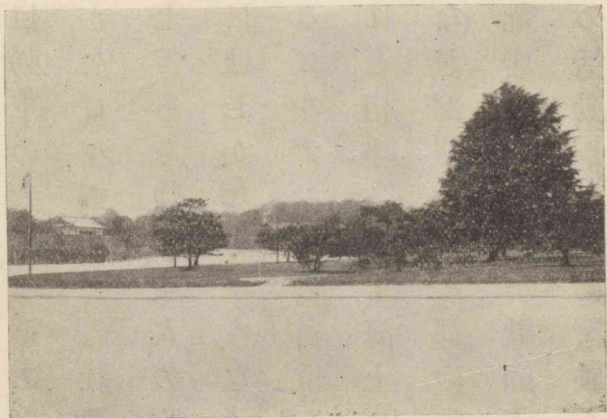
ビルディング  
無数の貨事務  
室を有する大  
洋館

丸ビル  
丸の内ビルヂ  
ングの略  
海上ビル  
海上火災保險  
會社ビルヂン  
グの略

すものは、驛前の大きな美しい廣場と、その廣場を埋めた自動車の大群と、その廣場のかなたを取巻く蜃氣樓のやうなビルディングの壯觀であらう。それは東京の大玄關として、あらゆる旅人の胸に、最初の強い印象を植ゑつけずにはおかないやうな鮮明な都市風景である。ここに集まるビルディングの首位を占めるものは丸ビルであるが、それと相呼應して、海上ビル・郵船ビル・八重洲ビル・昭和ビルなどが華やかに都の空を劃つて、そのおの／＼の内部に雑居する銀行・會社・商店・事務所では、目まぐるしいばかりの活動が不斷に續けられてゐるのである。

東京驛から宮城は程近い。驛前に立てば、もうお濠を隔

てて、大内山の松の翠<sup>みどり</sup>がちら／＼と目に入る。小松の茂る



丸の内

丸の内に漲るすが／＼しい氣分は、その目も遙かな地域と相まつて、實に何ともいへない感銘を人々の心によび起させる。あの二重橋のあたりの崇高さはどうであらう。お濠の水は塵一つとゞめず、堤の芝生は刈りこまれたやうに美しい。二重橋の前は、たとひ雨の日であつても、皇居を拜する人々が絶えたことはない。

宮城を中心にして、その附近には宏莊な官衙<sup>くわんが</sup>の建物が

屹立して、帝都の威嚴を示してゐるが、就中宮城の背後の高臺に堂と聳え立つてゐる全石造の建物は新貴衆兩議院であつて、これこそ東洋一を誇る大建築物である。なほ丸の内の近くには、皇居を守護するやうに靖國神社が九段坂上に鎮座して、その正面の青銅の大鳥居は、これまた他に比がないといはれてゐる。



新貴衆兩議院

丸の内を去つて、あたかも軍港に錨をおろした一大艦



銀座、座

十字街頭に立つ自動信號器のベルの音と交響し、街全體

隊とでもいひたいやうな新聞社、保險會社などの建物を右に見、左に見つゝ行けば、間もなく銀座に出る。そしてここにはまた銀座獨得の氣分が醸し出されてゐるのである。電車、自動車、乗合自動車、貨物自動車、自轉車は、街一ぱいにほとばしる激流のやうに疾驅して、警笛の音は、

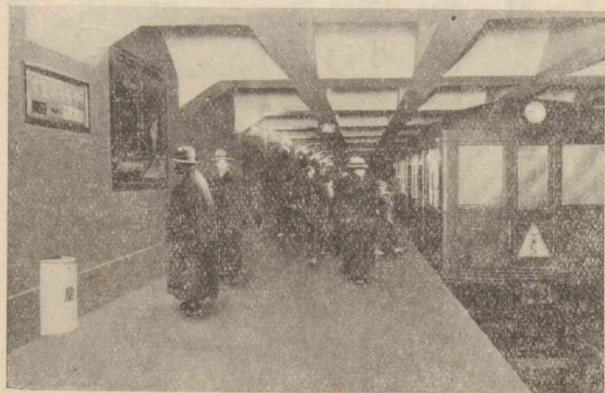
が一種のうなりを發してゐるかのやうにさへ思はれる。それは、何といふあわたゞしい都會生活の姿であらう。兩側に並ぶのは、悉く都下一流の商店で、飾窓の美しさを競ひ、店頭のリヂオは快い音律を漂はし、百貨店は日に幾萬の人々を吞吐してゐる。

二

銀座から日本橋通を経て上野廣小路に至る通は、最も目抜の大通であつて、電車、自動車の流は深夜になるまでをやみがなない。上野廣小路の正面は上野公園である。この公園は日比谷、芝、淺草公園と並ぶもので、特に日比谷が音楽堂をもつてゐるのに對し、美術館をもち、秋の美術の季



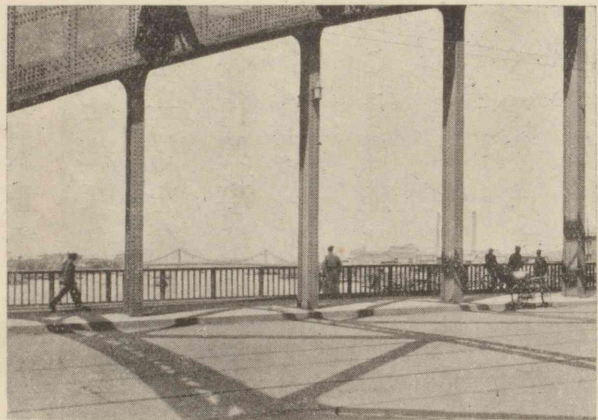
節には、花見の頃にも増して、多くの人々を吸収する。なほここには博物館もあれば、動物園もあり、不忍池を隔てては、本郷臺の帝國大學の時計臺が間近に望まれ、上野驛方面に歩を運べば、淺草觀音堂の屋根も、五重の塔も、指呼の間に展望される。公園を下れば、地下鐵道の高速電車は、地上の雑沓をよそにして、人々を瞬く間に淺草へと導く。



地下鐵道

淺草公園が都の人々の娛樂境として、四時人の波に埋

もれてゐることは、今も昔も變りないが、そこから數歩の



永代橋から清洲橋を望む

場街に林立する煙突と共に、いかにも近代都市らしい爽

うちに隅田川は、川面一ぱいに小蒸氣船やボートや荷舟を浮かべて、涼しい水の色を光らせながら漫々と流れてゐるのである。そして隅田川に跨がる十に餘る鐵橋は、虹のやうに中空を切つて、世界の橋のあらゆる様式を示す展覽會のやうな觀を呈し、對岸の本所、深川の新工

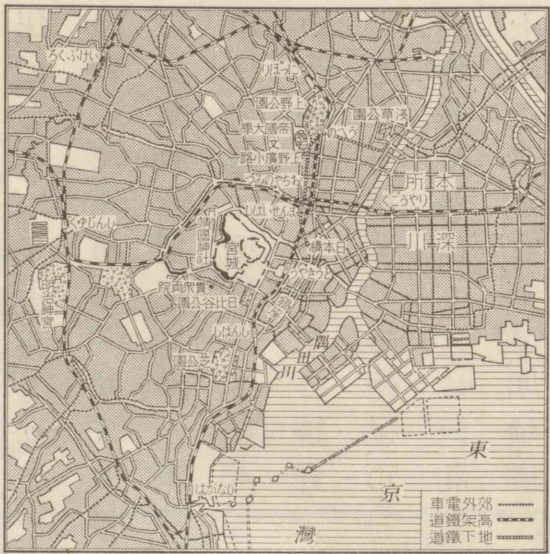
かな風景をつくつてゐる。

あの大正十二年九月一日に突如として起つた大震火災は、下町一帯を焦土と化した。その後、復興事業は着々と捗つた中にも、この隅田川の數々の鐵橋こそは、他にさきがけて、完成された新東京の姿の一部を形づくつたものであつた。橋梁に次いで道路も、降れば泥、晴れては塵の謗を根柢から拭ひ去るやうに、幅も廣げられ、アス



(近附園公谷比日) 路道たれき成完

ファルトの鋪装も見事に完成して、いはゆる坦々砥のや

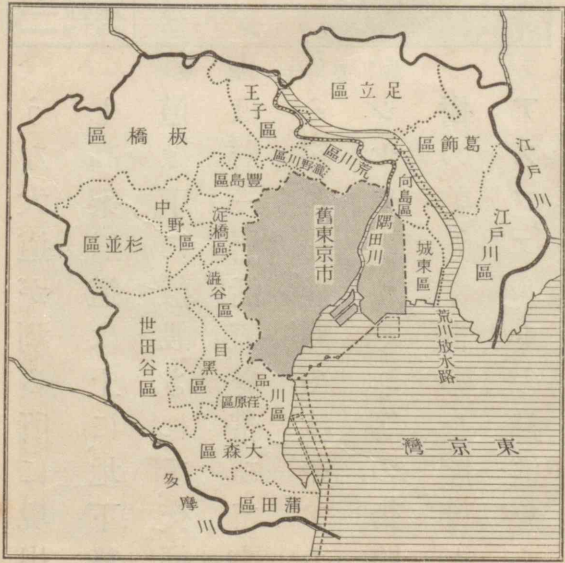


うな大道が到る所に現出し、高架鐵道は上に、地下鐵道は下に敷設されて、交通は層一層活氣を帯びて來る。銀杏や篠懸や橡やアカシヤや——それ等の街路

も軽く往來する人々の心には、このあたりがかつて満目焦土となり、古への武藏野を髣髴させたことがあつたと

は想像もつかないであらう。

震火災を蒙らなかつた山の手方面は、大部分が學校や住宅をもつて占められてゐるので、下町に見るやうな目立つた變化はないが、市の周圍に接續する町村の發展は、震災後急に目覺ましさを加へ、その結果、地域の擴張を促し、遂に昭和七年十月一日より、明治神宮の鎮まります代々幡町をはじめ近郊八十二箇町村が



世界第二位  
第一位はニユー  
ヨーク(人口  
七百萬)の人

〔禁轉載〕

徳富健次郎  
號は蘆花、  
家、熊本縣  
人、昭和二年  
歿の作

新に東京市に編入されることとなつた。この新しい大東京こそは、總面積五百五十平方料、その人口は無慮五百萬に達するもので、かくして一躍世界第二位の大都會となりおほせたのである。

江戸時代三百年の覇府が、東京と改稱されたのは明治元年であつたが、翌二年車駕の東遷があり、爾來六十餘年、震災後僅かに十年、……東京は世界各國環視の中に、奇蹟的な飛躍を遂げて來たといつても過言ではあるまい。

### 二五 雜木林

徳富健次郎

東京の西郊、多摩の流に到るまでの間には、幾箇の丘あ

り、谷あり。幾條の往還はこの谷に下り、この丘に上り、うねうねとして行く。谷は田にして、概ね小川の流あり、流には稀に水車あり。丘は拓かれて、畑となれるが多きも、そここには角にしきられたる多くの雜木林ありて残りり。

余はこの雜木林を愛す。

木は檜・樺・榛・栗・榿など、なほ多かるべし。大木稀にして、多くは切株より簇生せる若木なり。下ばえは大抵綺麗に拂ひあり。稀に赤松・黒松の挺然林より秀でて翠蓋を碧空にかざすあり。

霜おりて大根ひく頃は、一林の黄葉錦してまた楓林を羨まず。

その葉落盡くして、寒林の千萬枝簇々として寒空を刺すもよし。日落ちて煙地に滿ち、林梢の空薄紫になりたるに、大月盆の如く出でたる、最もよし。

春來りて、淡褐・淡綠・淡紅・淡紫・淡黄などの柔かなる色の限りを盡くせる新芽をつくる時は、何ぞ獨り櫻花に狂せんや。

青葉の頃、この林中に入りて見よ。葉々日を帯びて、綠玉・碧玉・頭上に蓋を綴れば、我が面も青く、もしうたゝ寢せば、夢また綠ならん。

初茸の時候には、林を縁どる萩・薄穂に出で、をみなへし。刈萱林中に亂れて、自然はここに七草の園をつくれり。

月あるもよし、月なきもまたよし。風露の夜これ等の林のほとりを過ぎよ。松蟲・鈴蟲・響蟲くわがむし・きりぎりす、蟲といふ蟲の音、雨の如く流るゝを聞かん。おのづから蟲籠となれるも妙なり。

(自然と人生)

日本女子讀本 卷一 終

浦野製

昭和七年六月二十四日印刷  
昭和七年六月二十七日發行  
昭和八年八月二十一日訂正再版印刷  
昭和八年八月二十四日訂正再版發行

日本女子讀本 第二版訂卷一

定價 金六拾貳錢

著者

高木武

發行者

東京市神田區神保町一丁目三番地  
合資會社 富山房

代表者

坂本嘉治馬

印刷者

東京市芝區芝浦町三丁目二番地  
川口芳太郎

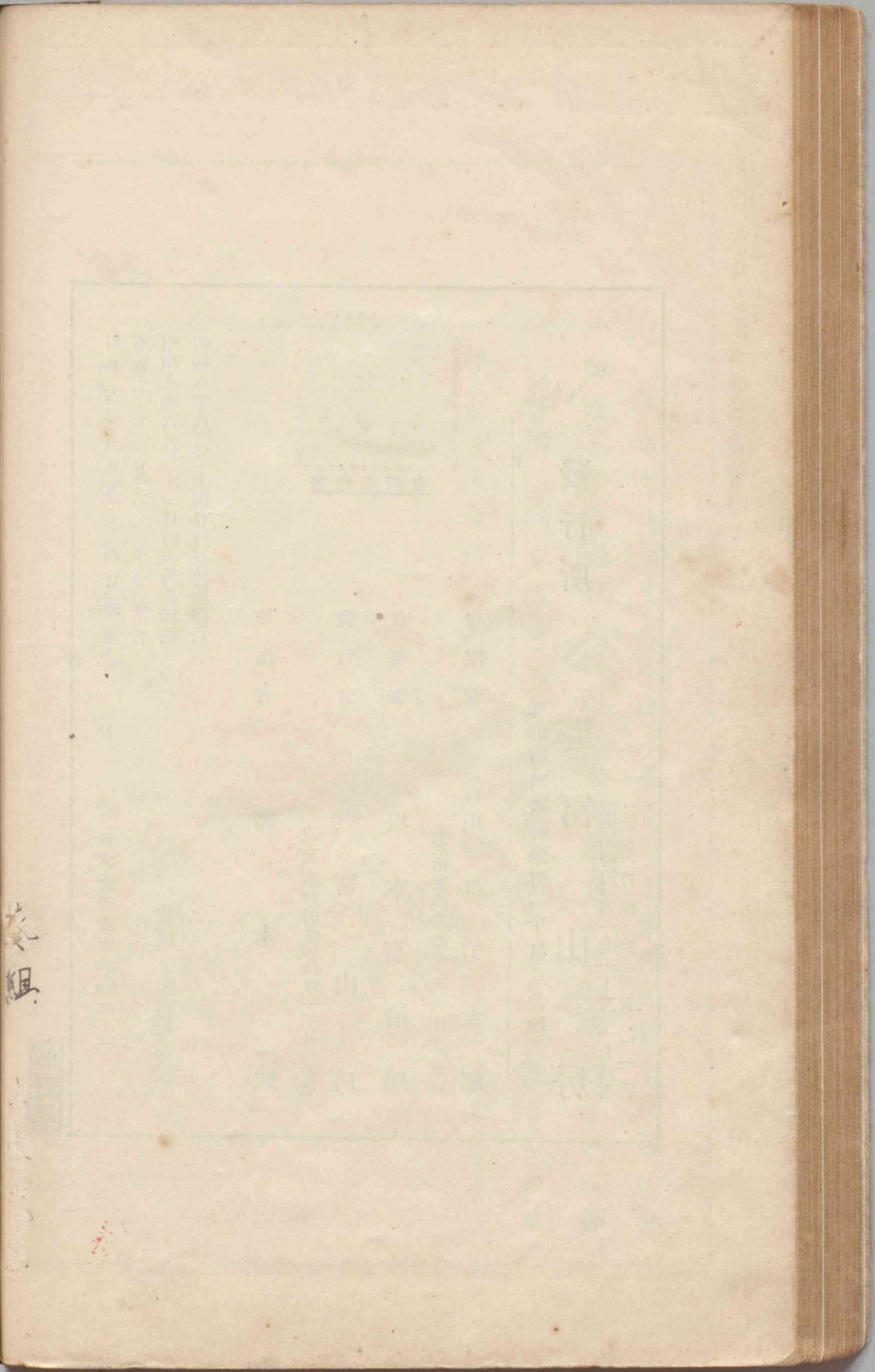
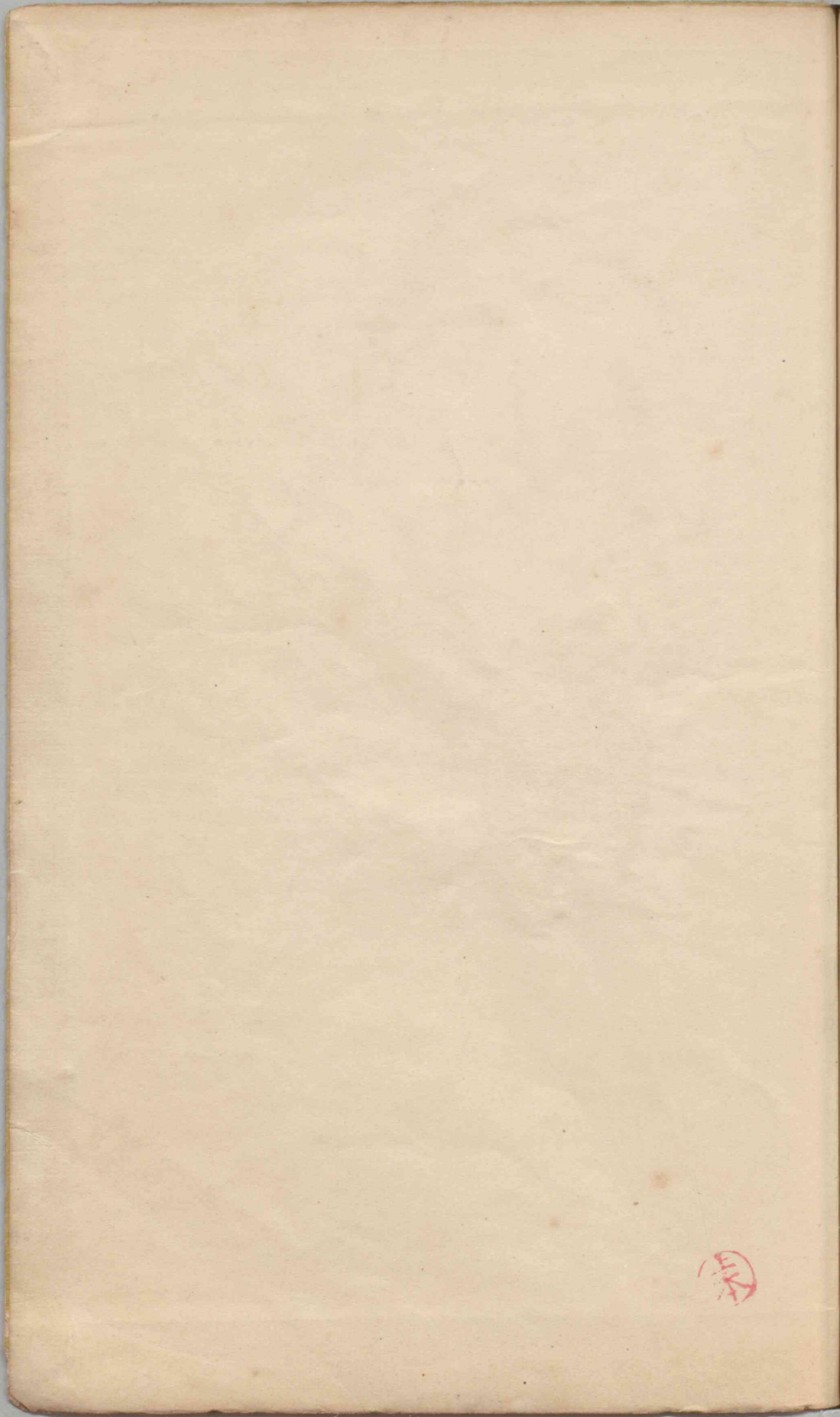


著者權所有

發行所

東京市神田區神保町一丁目三番地  
合資會社 富山房

電話神田二六一七二、一七八番  
振替口座 東京五〇一八番



茶  
組

茶

茶

